

宮苑井ノ口遺跡

第5次調査報告書

－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2009

大分市教育委員会

宮苑井ノ口遺跡

第5次調査報告書

－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2009

大分市教育委員会



宮苑井ノ口遺跡遠景（南方向より）



宮苑井ノ口遺跡遠景（西方向より）



第5次調査区全景（北が上）



周辺調査区合成（北が上）

序 文

本書は、平成20年に実施しました宮苑井ノ口遺跡第5次発掘調査の成果を収録した報告書です。

今回の調査では、弥生時代と古墳時代の住居の跡や、弥生時代の終わり頃にムラを区画した溝跡を発見しました。さらに、弥生時代から古墳時代にかけて、住居が増加しムラが発展した事がわかりました。また、高台に住居が立ち並ぶ様子など、ムラの立地した地形についても新たな知見を得ることができました。

本遺跡の位置する賀来西土地区画整理事業地は、商業地や住宅地として発展しています。都市化によって、景観は大きく変わりつつありますが、先人達がこの地に刻んだ郷土の歴史を示す資料として、本書を活用していただければ幸いです。

末筆ではありますが、本書の発刊にあたり、ご配慮、ご協力いただきました関係各位に対しまして、心より感謝申し上げます。

平成21年3月31日

大分市教育委員会

教育長 足立 一馬

例 言

1. 本書は大分市賀来西土地区画整理事業地内に位置する大分市大字宮苑字井ノ口73において集合住宅建設に伴い行われた「宮苑井ノ口遺跡第5次調査区」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 開発面積は約1,343㎡であり、事前の試掘調査で遺構の確認された地点に調査区を設定し約200㎡について発掘調査を行った。
3. 発掘調査は大分市教育委員会が主体となり、平成20年5月7日から6月30日にかけて実施した。
4. 調査担当は永松正太・古川所・奥村義貴である。
5. 発掘調査に係わる掘削業務は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
6. 調査にあたっては、開発の主体者である葛城 昭氏の協力を得て行われた。
7. 現場遺構図面は調査担当の他、河野史郎・佐藤道文・三嶋桂司・山本哲也が作成した。
8. 現場遺構写真は調査担当が撮影を行った。
9. 遺構図面のトレースは奥村と青木（大分市臨時職員）が行った。
10. 空中写真撮影については、九州航空株式会社に委託した。
11. 出土遺物の整理作業については井口あけみが行った。
12. 出土遺物の実測・トレースについては、雅企画有限会社に委託した。
13. 出土遺物写真は古川が撮影した。
14. 本書の執筆は古川・奥村が行った。
15. 本書の編集は古川・奥村が行った。
16. 出土遺物及び記録資料は大分市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 遺構の規模及び標高については m を、遺物の法量については cm をそれぞれ使用している。
2. 遺構の実測の基準及び方位は国土座標（第Ⅱ座標系）を使用している。
3. 遺構略号は SA（欄列）・SD（溝状遺構）・SH（竪穴住居跡）・SK（土坑）・SX（その他の遺構）を使用している。

目 次

序 文

例 言

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
第3章 発掘調査の成果	6
1. 調査の概要	6
2. 各遺構	6
第4章 まとめ	28

図版目次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 周辺遺跡分布図 (S = 1/25,000)	3
第3図 賀来西土地区画整理事業地内調査区位置図 (S = 1/7,500)	4
第4図 第1・2・4・5次調査区遺構配置図 (S = 1/500)	5
第5図 調査区南壁土層図 (S = 1/60)	6
第6図 遺構配置図 (S = 1/100)	7
第7図 遺構全体完掘図 (S = 1/100)	8
第8図 SH002遺構実測図 (S = 1/60)	9
第9図 SH002出土遺物 (S = 1/4)	9
第10図 SH010遺構実測図 (S = 1/60)	9
第11図 SH010出土遺物 (S = 1/4)	9
第12図 SH018遺構実測図 (S = 1/60)	9
第13図 SH018出土遺物 (S = 1/4)	9
第14図 SH020遺構実測図 (S = 1/60)	11
第15図 SH020出土遺物 (S = 1/4)	11
第16図 SH021遺構実測図 (S = 1/60)	11
第17図 SH021出土遺物 (S = 1/4)	11
第18図 SH024出土遺物 (S = 1/4)	12
第19図 SH024遺構実測図 (S = 1/60)	12
第20図 SH025遺構実測図 (S = 1/60)	13

第21図	SH025出土遺物 (S = 1 4)	13
第22図	SH027遺構実測図 (S = 1 60)	13
第23図	SH027出土遺物 (1…S = 1 4・2…S = 1 2)	13
第24図	SH030遺構実測図 (S = 1 60)	14
第25図	SK087遺構実測図 (S = 1 40)	14
第26図	SH030・SK087・SX023出土遺物 (S = 1 4)	15
第27図	SH032遺構実測図 (S = 1 60)	15
第28図	SH032 (柱穴・焼土坑含む) 出土遺物 (S = 1 2・4)	16
第29図	その他住居 (SH022・062・114) 出土遺物 (S = 1 4)	16
第30図	SD008遺構実測図 (S = 1 60)	17
第31図	SD095遺構実測図 (S = 1 60)	18
第32図	SD008出土遺物① (S = 1 4)	19
第33図	SD008出土遺物② (S = 1 4)	20
第34図	SD008下層・SD095出土遺物 (S = 1 4)	21
第35図	SK001遺構実測図 (S = 1 60)	22
第36図	SK001出土遺物 (S = 1 4)	22
第37図	SK043遺構実測図 (S = 1 60)	22
第38図	SK043出土遺物 (S = 1 4)	22
第39図	SK005遺構実測図 (S = 1 20)	22
第40図	SK005出土遺物 (S = 1 4)	22
第41図	SK082遺構実測図 (S = 1 60)	22
第42図	SK082・084出土遺物 (S = 1 4)	22
第43図	SA090遺構実測図 (S = 1 60)	23
第44図	SA090出土遺物 (S = 1 4)	23
第45図	SD038・039・046・054遺構実測図 (S = 1 60)	23
第46図	水田部溝状遺構 (SD007・028・038・039・046・054)・水田出土遺物 (S = 1 2・4)	24
第47図	その他遺構 (SX003・SP014・SP016・SX019・SP029・SP056・SP057・SX061・SP076・SX083・ SP089・SK091・SK092・SK101・SD102) 出土遺物 (S = 1 4)	26
第48図	包含層 (SX015・100) 出土遺物 (S = 1 4)	26
第49図	縄文土器 (SD008・015・SH020・SK022・SK023・SD028・SD039・表土) (S = 1 4)	26
第50図	宮苑井ノ口遺跡第5次調査区変遷図	31
第51図	宮苑井ノ口遺跡変遷図 (弥生時代後期から中世まで)	32

巻頭写真図版

宮苑井ノ口遺跡遠景 (南方方向より)

宮苑井ノ口遺跡遠景 (西方方向より)

第5次調査区全景 (北が上)

周辺調査区合成 (北が上)

写真図版目次

遺構写真①.....39

- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| 1. SD008遺物出土状況（南方向より） | 2. SD008遺物出土状況近景①（南東方向より） |
| 3. SD008遺物出土状況近景②（南西方向より） | 4. SD008北側壁・遺物出土状況（南方向より） |
| 5. SD008南側壁・遺物出土状況（南方向より） | 6. SD008南側土層観察状況（南方向より） |
| 7. SD095南側壁・遺物出土状況（南方向より） | 8. SD095土層観察状況（南方向より） |

遺構写真②.....40

- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| 1. SD008完掘状況（南方向より） | 2. SD095完掘状況（南方向より） |
| 3. SD095南側壁・遺物出土状況（北方向より） | 4. SH002完掘状況（北東方向より） |
| 5. SH010床面検出状況（北西方向より） | 6. SH010貼床土層観察状況（北西方向より） |
| 7. SH018土層観察状況（南方向より） | 8. SH020土層観察状況（北西方向より） |
| 9. SH020完掘状況（北西方向より） | |

遺構写真③.....41

- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| 1. SH021土層観察状況（南東方向より） | 2. SH021完掘状況（南東方向より） |
| 3. SH024遺物出土状況（南東方向より） | 4. SH024遺物出土状況近景（南東方向より） |
| 5. SH024遺物下土層観察状況（南東方向より） | 6. SH024完掘状況（南東方向より） |
| 7. SH025土層観察状況（西方向より） | 8. SH025完掘状況（西方向より） |

遺構写真④.....42

- | | |
|------------------------|---------------------------------|
| 1. SH027土層観察状況（北東方向より） | 2. SH027完掘状況（北東方向より） |
| 3. SH030土層観察状況（南東方向より） | 4. SK087土層観察状況（南東方向より） |
| 5. SK087遺物出土状況（南東方向より） | 6. SH030完掘状況（南東方向より） |
| 7. SH032土層観察状況（南西方向より） | 8. SH032柱穴（SP069）遺物出土状況（南西方向より） |

遺構写真⑤.....43

- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| 1. SH032上面完掘状況（南西方向より） | 2. SH032貼床土層観察状況（南西方向より） |
| 3. SH032完掘状況（南西方向より） | 4. SK001土層観察状況（北方向より） |
| 5. SK082・084土層観察状況（南方向より） | 6. SK082完掘状況（南方向より） |
| 7. SK005遺物・石出土状況（南方向より） | 8. SK005土層観察状況（南方向より） |

遺構写真⑥.....44

- | | |
|-----------------------------------|-------------------------|
| 1. SK005完掘状況（南方向より） | 2. SA090検出状況（南方向より） |
| 3. SD038・039・046・054土層観察状況（南方向より） | 4. SD046土層観察状況（南方向より） |
| 5. 調査区南壁東側土層観察状況（北方向より） | 6. 調査区南壁中央土層観察状況（北方向より） |
| 7. 調査区南壁西側土層観察状況（北方向より） | 8. 調査区完掘状況（西方向より） |

遺物写真①.....45

- | | | | |
|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 1. SD008 第32図1 | 2. SD008 第32図2 | 3. SD008 第32図3 | 4. SD008 第32図4 |
|----------------|----------------|----------------|----------------|

5. SD008 第32圖 5	6. SD008 第33圖 2	7. SD008 第33圖 3	8. SK087 第25圖 3
9. SD008 第33圖11	10. SD008 第33圖 1	11. SD008 第33圖12	12. SD008 第33圖10
13. SD008 第33圖13	14. SD095 第34圖 7	15. SK087 第26圖 2	16. SH032 第27圖 1・2

遺物写真②.....	46
------------	----

1. SK005 第40圖	2. SH024 第18圖 1	3. SH024 第18圖 2・3・4	4. SH024 第18圖 5
5. SH027 第23圖 2	6. SH032 第28圖 3	7. SH032 第28圖13	

表目次

表1-1 遺物觀察表①.....	33
表1-2 遺物觀察表②.....	34
表1-3 遺物觀察表③.....	35
表1-4 遺物觀察表④.....	36
表2-1 遺構一覽表①.....	37
表2-2 遺構一覽表②.....	38

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

大分市賀来西土地地区画整理事業地内に位置する大分市大字宮苑字井ノ口173において、集合住宅建設の事前申請が行われた。当地は宮苑井ノ口遺跡のほぼ中央に位置し周辺地においても調査によって遺跡が確認されているため、大分市教育委員会が平成19年11月20日から21日にかけて試掘調査を行った結果、申請地内で竪穴住居跡と水田跡等を確認した。協議の結果、発掘調査が必要であると判断し、平成20年5月7日から6月30日にかけて宮苑井ノ口遺跡第5次調査区として調査を行った。

2. 調査組織

平成20年度

調査主体 大分市教育委員会 教育長 足立 一馬

事務局 大分市教育委員会教育総務部
次長兼文化財課長 玉永 光洋

文化財課 参 事 岩田 祐治

管理係 課長補佐兼管理係長 福田 誠一

主 査	幸 俊昭	桑原 治	筒井 相信		
指導主事	姫野 公徳	植本 和美			
主 任	宮崎 勲	栗田 博之	加藤 キヌ	竹中 智美	

文化財係 課長補佐兼文化財係長 塔鼻 光司

専門員	坪根 伸也	池邊千太郎			
主任技師	塩地 潤一	高島 豊	河野 史郎	中西 武尚	
主 任	永松 正大				
主 事	佐藤 道文	五十川雄也	長 直信	古川 匠	
嘱 託	井口あけみ	五十川慎也	上原 翔平	佐藤 孝則	
	中町 憲治	羽田野達郎	羽田野裕之	穂田 智美	
	広瀬 育子	三嶋 桂司	山下 朋紀	山本 哲也	
	若林 善満	奥村 義貴			

第2章 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

本書で報告する宮苑井ノ口遺跡は、大分県中央部の大分市北西部に広がる大分川下流域に位置する大分市大字宮苑井ノ口に所在し、東端は賀来西遺跡に接地する。大分川下流域に広がる低地は、大分川デルタと総称され、地形から見て上野台地によって二分されており、上野台地の北側は自然堤防が卓越する特徴を有する。本遺跡は大分川と賀来川の開析によって形成された沖積平野の賀来川左岸に位置する。北側には金谷迫丘陵が迫っており、対岸の大きく開けた平野とは異なり、帯状の狭い平野となっている。

標高は約14～17mを測る。これまでの調査及び試掘調査により複雑に旧河道が走っていることが確認されている。また遺跡の中央部分には微高地が存在し、この地点を中心として居住域が展開している。



第1図 遺跡位置図

2. 歴史的環境

旧石器時代には、本遺跡北側に位置する金谷迫丘陵（金谷迫遺跡）とそこから東側に延びる庄ノ原台地（庄ノ原・机張原遺跡）及び賀来川対岸の野田山近辺（下黒野遺跡、野田山遺跡）に遺跡分布が認められる。

縄文時代には、早期の集落が認められる。本遺跡の北側に位置する金谷迫丘陵上の金谷迫遺跡では、条痕文土器、チャート製石器が出土した（大分市教育委員会2004）。また、野田山丘陵では野田山遺跡が挙げられる。標高90mの台地上から炉穴や集石が検出され、条痕文土器が出土している。また、下黒野遺跡でも調査が実施されており、集石が検出され、条痕文土器、押型文土器が出土している。後期になると、本遺跡北西部の放生池遺跡でも多数の縄文土器や姫島産黒曜石製石器等が採集されており、本遺跡でも当該期の土器が若干量出土している。

弥生時代には、大分県の刻目突帯文土器の標識遺跡である下黒野遺跡がある。また、雄城台遺跡、賀来中学校遺跡、尼ヶ城遺跡、守岡遺跡では、堅穴住居跡が多数確認されている。特に雄城台遺跡からは後漢鏡の破片、県指定文化財の巴形銅器が出土している。また、宮苑井ノ口遺跡の既往の調査では、弥生時代から古墳時代の堅穴住居が密に検出されている。また住居の近隣地点に小児用と推定される甕棺墓群が検出されている。

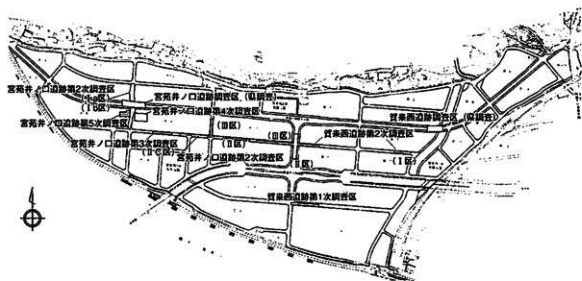
古墳時代の遺跡として、当遺跡の西側に位置する河岸段丘上には、大分平野唯一の装飾古墳として国指定史跡に登録されている千代丸古墳、岩御堂横穴墓群が位置し、北方の金谷迫丘陵上には餅田古墳群、餅田横穴墓群があり、北東部の井出ノ上古墳、井出ノ上横穴墓群、上片面横穴墓群、県指定史跡の丑殿古墳、蓬来山古墳、田崎古墳群、深河内古墳と続く。丘陵の縁辺部には前方後円墳や横穴式石室を有する古墳が点在する。また新しい時期の横穴墓群も多く分布し、有力な首長系譜の存続が想定され、特に横穴式石室墳の造営される古墳時代後期末には、大分平野の古墳文化の中心地でさえあったようである。宮苑井ノ口遺跡の立地する河岸段丘上は、これらの古墳を造営した集団のいわば本拠地と目される地点である。

古代の遺跡として、賀来川の対岸に展開する賀来条里跡があり、大分川北岸と賀来川南岸大字国分には古代を象徴する国指定史跡の豊後国分寺跡が所在し、梵鐘鋳造遺構等が検出され、尼寺の存在を示す墨書土器が出土している。また、宮苑井ノ口遺跡北側の金谷迫遺跡では7世紀、9世紀代の炭焼窯が検出されている。また、賀来



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	宮苑井ノ口遺跡	弥生・古墳	19	石脚堂横穴墓群	古墳	37	田崎遺跡	弥生・古墳
2	賀来西遺跡	弥生・古墳・中世	20	餅田古墳群	古墳	38	田崎古墳群	古墳
3	賀来条里跡	古代・中世	21	中尾遺跡	古墳	39	深河内古墳	古墳
4	中尾古墳	古墳	22	小原横穴墓	古墳	40	小野鶴横穴墓群	古墳
5	中尾古墳2号墳	古墳	23	机根原遺跡	縄文	41	椿ヶ丘横穴墓群	古墳
6	賀来中学校遺跡	弥生・中世	24	金谷迫古墳	古墳	42	玉沢地区条里跡	古代
7	下黒野遺跡	旧石器ほか	25	金谷迫丸山城跡	中世	43	下迫古墳	古墳
8	野田山遺跡	旧石器ほか	26	井手ノ上横穴墓群1	古墳	44	虎御前古墳	古墳
9	野田遺跡	旧石器ほか	27	井手ノ上横穴墓群2	古墳	45	高来山第2横穴墓群	古墳
10	国分台遺跡	縄文	28	井手ノ上古墳	古墳	46	漆間横穴墓群	古墳
11	上片面遺跡	縄文	29	上片面横穴墓群	古墳	47	六部塚古墳	古墳
12	国分遺跡	古代	30	庄殿古墳	古墳	48	大管横穴墓群	古墳
13	豊後国分寺跡	古代	31	上片面遺跡	縄文	49	大管2横穴墓群	古墳
14	鎌ヶ丘酒磨屋仏	中世	32	庄ノ原片面遺跡	縄文	50	小柳遺跡	古墳
15	千代丸古墳	古墳	33	蓬来山古墳	古墳	51	大管3横穴墓群	古墳
16	宮苑キリシタン墓	江戸	34	万寿山古墳群	古墳	52	高来山第3横穴墓群	古墳
17	宮苑遺跡	中世	35	庄ノ原遺跡	旧石器ほか	53	下原遺跡	弥生
18	中村遺跡	弥生	36	餅田横穴墓群	古墳			

第2図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

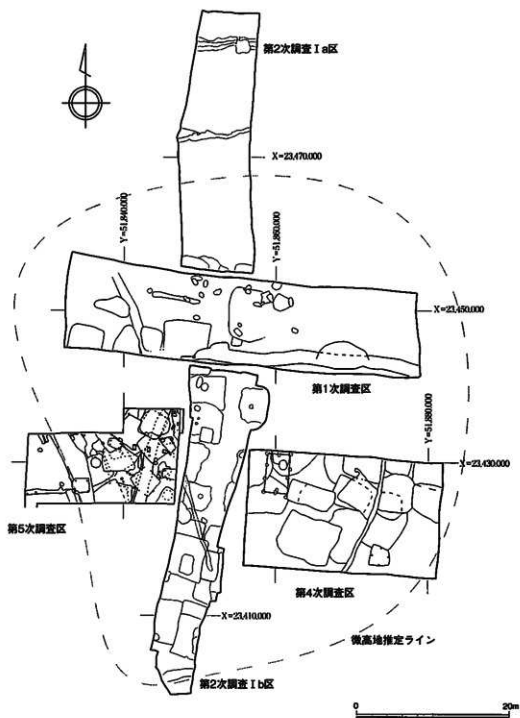


第3図 賀来西土地画整理事業地内調査区位置図 (S = 1 7,500)

西道跡及び本道跡では当期の水田柄が確認されているが、条里はなかったものと考えられる。

中世には、賀来氏が一帯を掌握するが、賀来氏の居館が現在の賀来神社境内である、とする伝承がある。大分県教育委員会による発掘調査では、神社に隣接する賀来中学校道跡、賀来・城道跡において12世紀後半代の土師器や磁器の出土した溝状遺構が検出されており、伝承どおり居館の可能性がある。また、本道跡の西側に位置する宮苑道跡では、13世紀代の名主または地頭柄の居館跡とされる建物群が調査されている。千代九古墳が敷地内に存在することから、築山として転用された可能性が指摘されている。

近世には府内藩主日根野吉明の主導による初瀬井路の開削（1650年）を嚆矢として、対岸に比べ水利の悪かった当地域も大規模な水田開発が始まり、近世を通じて賀来村の石高は増加し続ける。これと対応するように、大分市教育委員会による賀来西道跡第1・2次調査では、近世になってから水田域の面積が大幅に拡大することを示す所見が得られている。平成14年に賀来西土地画整理事業が施工されるまで、宮苑井ノ口道跡・賀来西道跡は一面の水田であったが、この景観は近世の新田開発によって生み出されたのであろう。現在は都市化が進み商業地・住宅地として発展している。



第4図 第1・2・4・5次調査区遺構配置図 (S=1/500)

第3章 発掘調査の成果

1. 調査の概要

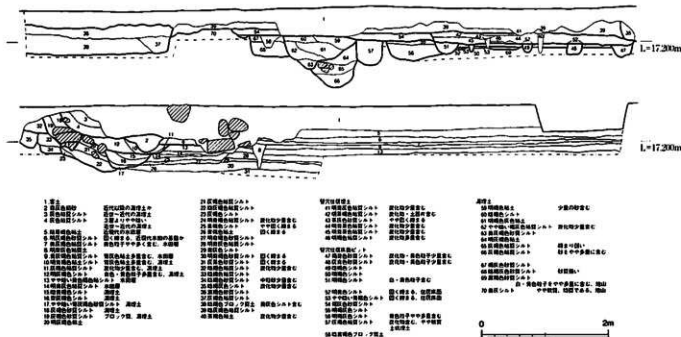
今回の調査地である大分市大字宮苑字井ノ口73は宮苑井ノ口遺跡のほぼ中央に位置し、北側に宮苑井ノ口遺跡県調査区と第2次調査1a区が、東側には第2次調査1b区と第4次調査区が位置する。これまでの周辺地調査により、弥生時代中期頭頃から古墳時代後期の集落域と弥生時代後期頃から古墳時代前期の墓域が確認されている。今回の調査地においては、隣り合う調査地点の状況より集落域が拡大し展開することが想定された。事前の確認調査により東側では竪穴住居跡の展開する微高地部分が、西側では水田跡の展開する低地部分が確認された。微高地部分の端部の状況も把握できるように調査区を設定した。本来の遺構検出面からの確認は上位に位置する水田層の影響により困難であるため、この層の中層まで重機による表土剥ぎを行い、調査を開始した。

調査の結果、本調査区の東側約3.4mが竪穴住居跡の展開する微高地部分であり、西側の残り約1.4mが水田跡の展開する低地部分であった。今回の調査では微高地部分を主に調査の対象とし、低地部分においては部分的な確認に留めた。微高地部分では全面に竪穴住居跡が展開し、調査区東側では南北方向に延びる溝状遺構を確認している。また北東方向から南西方向に向けて下る低地部分では近世から古代と考えられる各水田層を確認し、これに伴うように微高地部分と低地部分の境で南北方向に延びる溝状遺構を確認している。

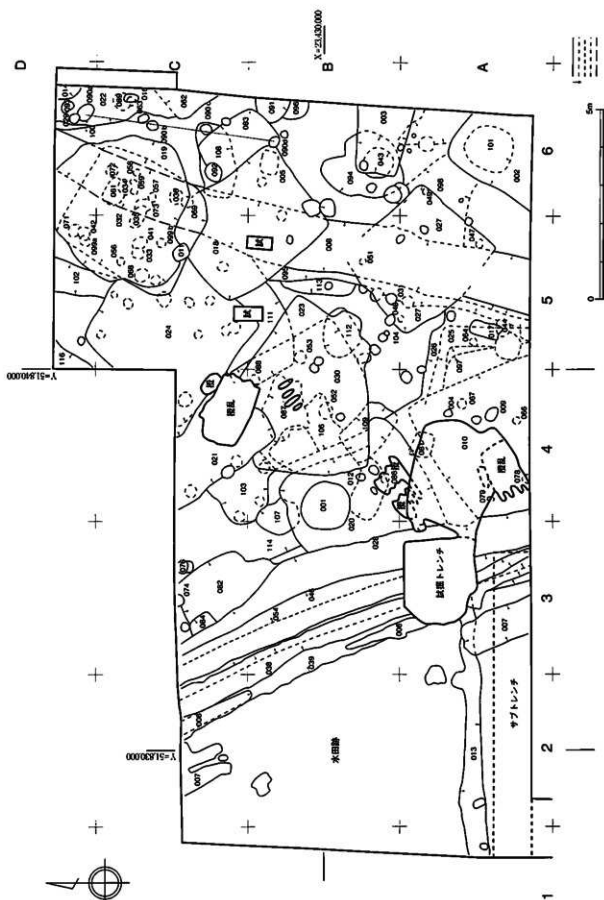
2. 各遺構

竪穴建物・竪穴遺構

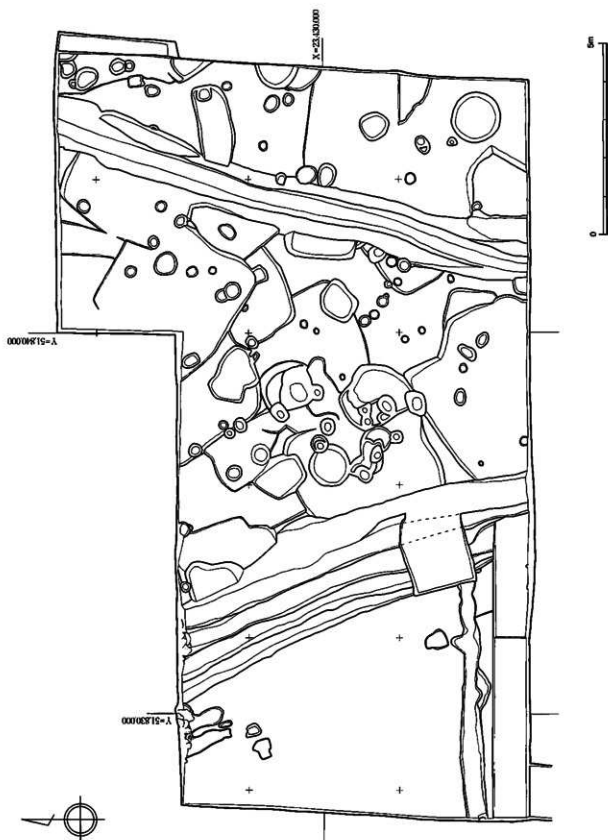
調査区南東隅で確認されたSH002は、長軸約2.5+0m・短軸約2.1+0m・深さ約0.4mを測り方形プランになると想定される竪穴遺構である。主柱穴は確認されていないが竪穴住居跡の可能性が高いと考えられる。大半が調査外に展開するため規模は不明である、周辺の竪穴住居跡と比較して、全体の1.3を確認できたと考えられる(第8・9図、遺構写真②④)。調査区中央南隅で確認されたSH010は、長軸約3.6+0m・短軸約3.4+0m・



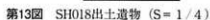
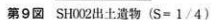
第5図 調査区南境土層図 (S=1 60)



第6図 遺構配置図 (S = 1/100)



第7図 遺構全体完掘図 (S=1 100)



深さ約0.2mを測る方形プランの堅穴住居跡である。焼土と貼床が確認できる。土層観察より同地点において少なくとも1回の建替えが行われているものと考えられる。主柱穴の可能性のあるビットを2基確認している。微高地部分の西端に位置し西側は溝状遺構によって消失し、南側は調査区外に展開しているため全容は確認されなかった(第10・11図、遺構写真②5～6)。第11図1は複合口縁壺口縁部である。口縁部外面全面に櫛状波状文を施す。2は壺の頸部から胴部破片である。屈曲部に断面三角形突帯を貼り付ける。3は壺破片である。

調査区東側中央で確認されたSH018は、長軸約3.6m・短軸約2.6m・深さ約0.2mを測る。今回全容が確認できた堅穴住居跡のなかで、唯一の長方形プランの堅穴住居跡である。主柱穴を3基確認している。北側隅が堅穴住居跡SH032に切られている。溝状遺構(SD008・095)埋没後、同上に位置する(第12・13図、遺構写真②7)。

第13図1は鉢である。内外面共にナデ調整である。2は古式土師器高杯の坏部か。内外面に細かい横方向のミガキを施す。

調査区のほぼ中央で確認されたSH020は、長軸約3.8m・短軸約2.4+ α m・深さ約0.1mを測る方形プランの堅穴住居跡である。微高地部分の西端に位置し、西側は溝状遺構によって消失している。主柱穴を1基確認しているが、この主柱穴に対応する箇所は土坑SK001と西側に位置する溝状遺構によって消失しており、他の主柱穴を確認することはできなかった。南東側の床面が若干高くなっており、ベット状遺構の名残の可能性が考えられる(第14・15図、遺構写真②8～9)。第15図1は弥生土器壺の口縁部から胴部にかけての破片である。内外面ともナデ調整を施す。2は平底の壺底部である。外面にタテハケが観察される。

調査区北側中央で確認されたSH021は、長軸約3.0+ α m・短軸約2.3+ α m・深さ約0.16mを測り方形プランとなる堅穴住居跡である。北側は調査区外に展開し、東側は堅穴住居跡SH024に切られているため、全容は不明である。主柱穴を2基確認している(第16・17図、遺構写真③1・2)。第17図1は壺口縁部破片か。2は鋤先状口縁を有する高杯の口縁部か。3は複合口縁壺である。頸部の内外面に細かい縦方向の工具ナデを施す。口縁部外面に櫛状波状文が1条施される。

調査区北側で確認されたSH024は、一辺約3.5m・深さ約0.35mを測る方形プランの堅穴住居跡である。完掘時は住居跡の中央がマウンド状に盛り上がった形状になっている。主柱穴を確認している。建替えがあった可能性が考えられる。東隅を堅穴住居跡SH032により切られている。西隅は調査区外に位置する。南側の土坑内より壺が出土している(第18・19図、遺構写真③3～6)。第18図1は高杯の坏部である。胴部中ほどに接合痕があり、この位置で弱い段を有する屈曲部が形成される。2、3は高杯の脚部破片か。いずれも柱状の形態で、3には横方向の細かいミガキが施される。4は小型丸底壺である。やや粗雑な作りで、胴部、口縁部外面には細かいハケが観察される。胴部内面にはケズリが施される。5は直口口縁壺である。口縁部と胴部の境界でゆるい段がある。胴部内面にヘラケズリが施される。坪根編年土師器Ⅱb期、古墳時代前期前葉に位置づけられる。

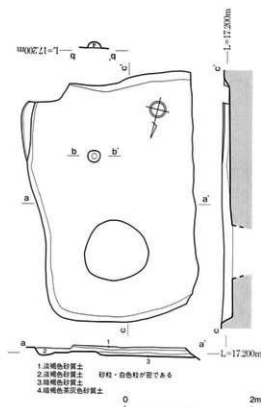
調査区南側中央で確認されたSH025は堅穴住居跡SH010の東側で一部重複し、長軸約2.5+ α m・短軸約2.0+ α m・深さ約0.1mを測る方形プランの堅穴住居跡である。主柱穴の可能性のあるビットを3基確認している。そのうち2基は堅穴住居跡SH010内に位置し、SH010内の焼土プランを切って1基は確認されている。南側は調査区外に展開する(第20・21図、遺構写真③7・8)。第23図1は複合口縁壺口縁部、2は壺の口縁部か。

調査区南西側で確認されたSH027は、長軸約3.0m・短軸約2.8m・深さ約0.1mを測るほぼ正方形に近いプランの堅穴住居跡である。主柱穴を4基確認している。溝状遺構(SD008・095)埋没後、同上に位置する(第22・23図、遺構写真④1・2)。第23図は結晶片岩製の打製石製品である。片側から刃部を形成する。擦痕が刃部形成面に観察される。石包丁か。

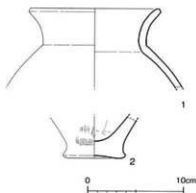
調査区のほぼ中央で確認されたSH030は、長軸約3.1+ α m・短軸約3.1m・深さ約0.08mを測るほぼ正方形プランの堅穴住居跡である。主柱穴を3基確認している。住居内で確認された焼土と遺物を含む直径約1.5m・深さ約0.2mを測る土坑SK087は住居に伴わない可能性も考えられる。また検出時プランSX023内には、このSH

030を含めて3棟の住居跡が存在したと考えられるが残存状態が浅く明確に確認できたのはこのSH030の1棟に留まった。残りは、方角は異なるが規模が、ほぼ同一であることからほぼ同地点における建替えが行われたものと想定される。北側の一部を竪穴住居跡SH021に切られている(第24・25・26図、遺構写真④3～6)。第26図1はSH030出土甕胴部片である。胴部外面はタテハケのみで、口縁部外面はタテハケ後ヨコナデを施す。2～4はSK087出土遺物である。2は器種不明であるが、大型器台の体部である可能性がある。口径13.0cm、残存長13.9cmを測る。3は甕底部である。やや不安定な平底状の器形で、外面にタテハケが観察される。4はく字形口縁の長胴甕である。胴部内外面にハケを施す。5～7はSX023出土遺物である。5はスカート状に広がる脚部である。高坏脚部か。6は平底の甕底部である。3と同様の器形か。7は甕口縁部か。ヨコナデを施す。

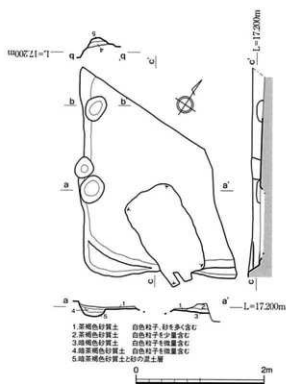
調査区の北東側で確認されたSH032は長軸約3.3m・短軸約3.1m・深さ約0.36mを測るほぼ正方形プランの竪穴住居跡である。1回の建替えと貼床が確認できる。上面と下面で、それぞれ、支柱穴と焼土を含む土坑が確認されている。溝状遺構SD008埋没後の、同上に位置する(第27・28図、遺構写真⑤1～3)。



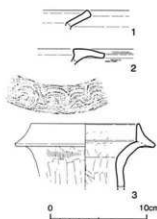
第14図 SH020遺構実測図 (S = 1/60)



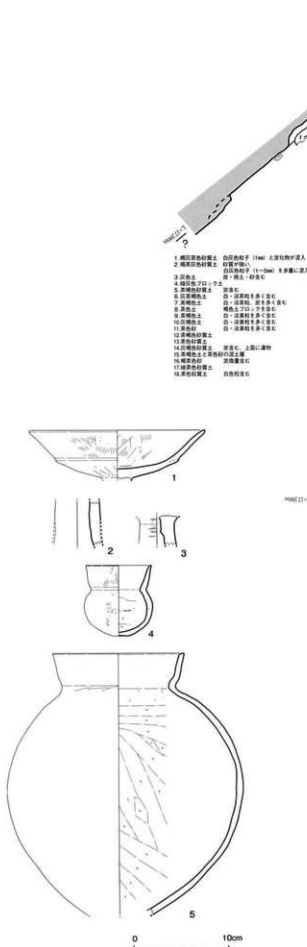
第15図 SH020出土遺物 (S = 1/4)



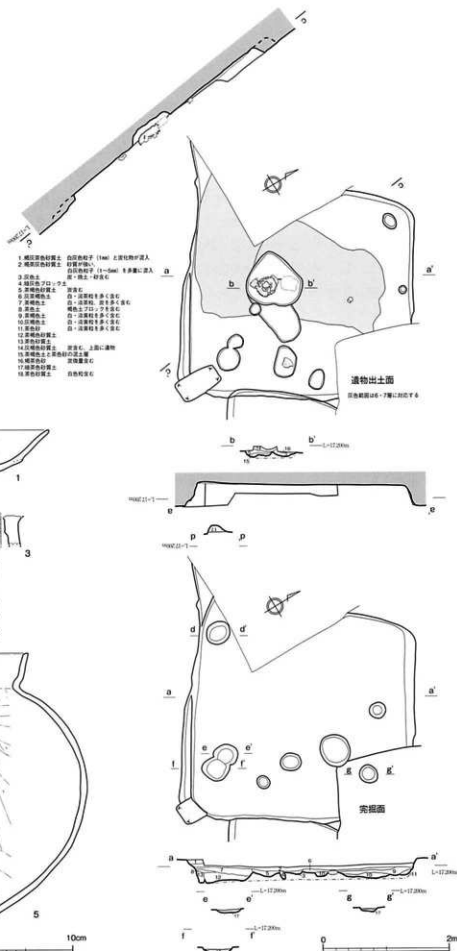
第16図 SH021遺構実測図 (S = 1/60)



第17図 SH021出土遺物 (S = 1/4)



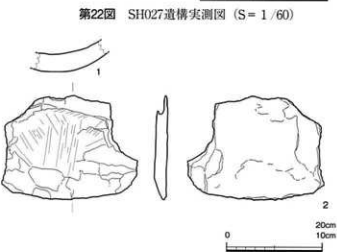
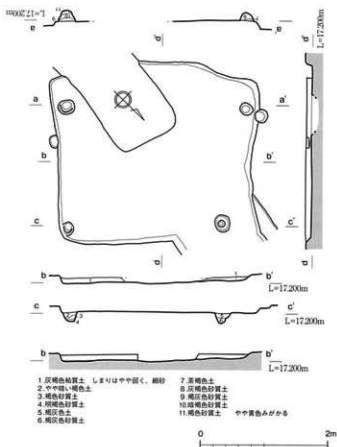
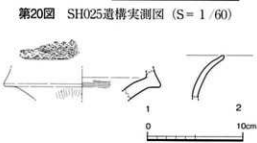
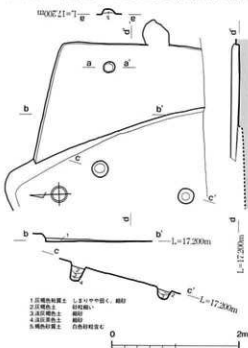
第18図 SH024出土遺物 (S = 1/4)



第19図 SH024遺構実測図 (S = 1/60)

第28図1、2は須恵器坏蓋である。3は土師質のミニチュア鉢である。手捏ね整形で、内面をナデる。4は土師器鉢である。内外面ともナデを施す。5は土師器鉢である。外面に指オサエ、内面にナデが観察される。6は土師器壺の口縁部か。内外面ともナデで整形した後、ミガキを丁寧に施す。7は土師器であるが、器種不明。赤褐色を呈し、丁寧に作りである。8は土師器甕、9は土師器小型甕である。内外面を工具ナデで仕上げる。10は土師器壺か。胴部に方形の貼り付け突帯を巡らす。11は弥生土器平底甕である。内外面ともナデ調整である。12は土師器大型鉢か。内外面ともハケ調整を行うが、内面のハケメの単位が粗い。13は安山岩製磨り石、たたき石である。14は、長小判形の結晶片石製磨製石製品である。長側面まで平坦に整形している。両端部は丸くすぼまり、器厚も薄くなる。一端に直径0.5cmのへこみがある。貫通はしないが、穿孔途中で止めたものかと考えられる。15~19はSH032に属する土坑、柱穴出土遺物である。15はSK035出土の土師器壺、16はSP036出土の土師器鉢、17、18はSP068出土の土師器鉢、19はSP069出土の須恵器壺胴部である。

この他にも、調査区北東端で確認されたSX022・062、調査区南側のほぼ中央で確認されたSX097、調査区東側で確認されたSX113、調査区北側のほぼ中央部分で確認されたSK114、調査区北側で確認されたSX116も部分的な確認であ

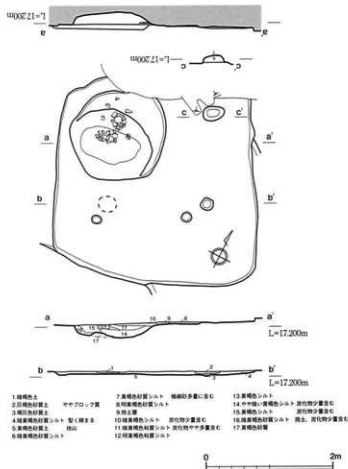


るが堅穴住居跡の一部である可能性が考えられる。これらの可能性のあるものも含むと18棟の堅穴住居跡が展開していたのもであると考えられる。このうちSX113のみが溝状遺構(SD008・095)より古い堅穴住居跡の可能性はあるが、大半を溝状遺構(SD008・095)に切られているため全容は不明である。第29図1はSX022出土の、須恵器坏蓋口縁部片である。2はSX062出土の、土師器壺である。外面ハケメ、内面に工具ナデが施される。3はSX062出土土師器甕である。胴部外面にタテハケが施される。4は弥生土器甕底部か。5は竈底部か。

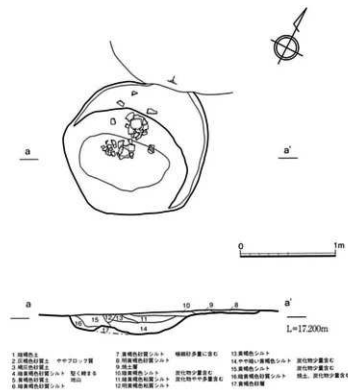
調査区東側で確認されたSH111は一辺約2+6m・深さ約0.2mを測る堅穴遺構である。大半を他の遺構、堅穴住居跡SH018・021・024、攪乱により、切られており全容は不明であるが、方形プランの堅穴住居跡である可能性が高いと考えられる。堅穴住居跡SH024と同様に中央がマウンド状に盛り上がった形状になっている。

今回の調査で微高地部分の全面で確認された堅穴住居跡は、周辺調査区である、県調査区、第2・4次調査区で確認された堅穴住居跡と比較すると、規模が小さく、建てられている方向も異なる物が多く見られた。また住居内からの出土遺物も比較すると少量である。

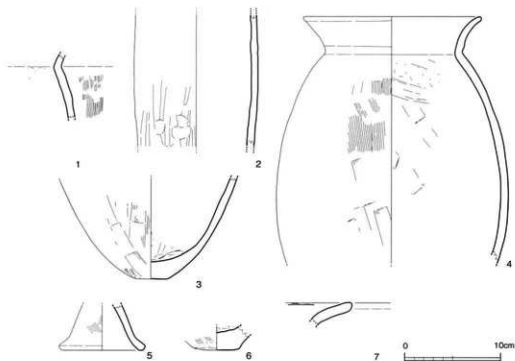
この集落の展開する微高地の西端を今回の調査で、北端を第2次調査Ia区・南端を第2次調査Ib区・東端を第4次調査でそれぞれ確認している。南北約65m・東西約55mを測る不整形形状の微高地であったと推測される。また周辺調査区も含めてこの集落の展開する微高地は、遅くとも近世では水田域へと変貌し、住居域は北側に位置する丘陵裾部に集中したものであると考えられる。



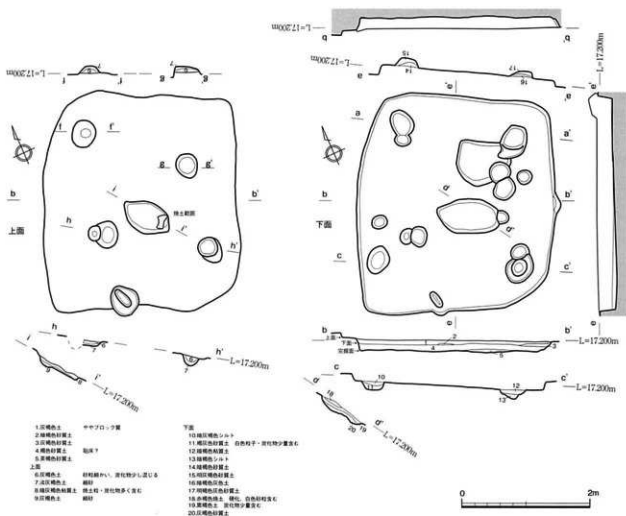
第24図 SH030遺構実測図 (S = 1/60)



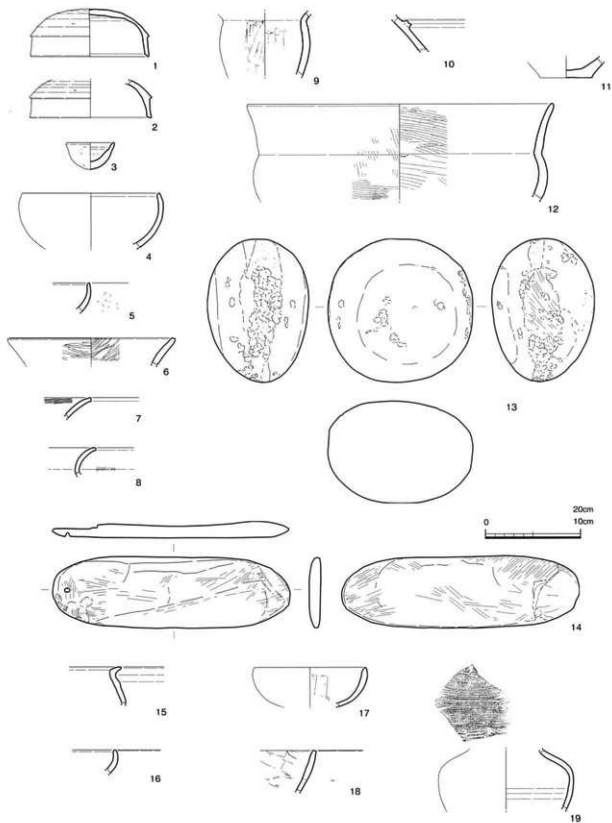
第25図 SK087遺構実測図 (S = 1/40)



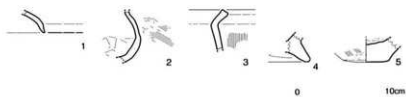
第26図 SH030 · SK087 · SX023出土遺物 (S = 1/4)



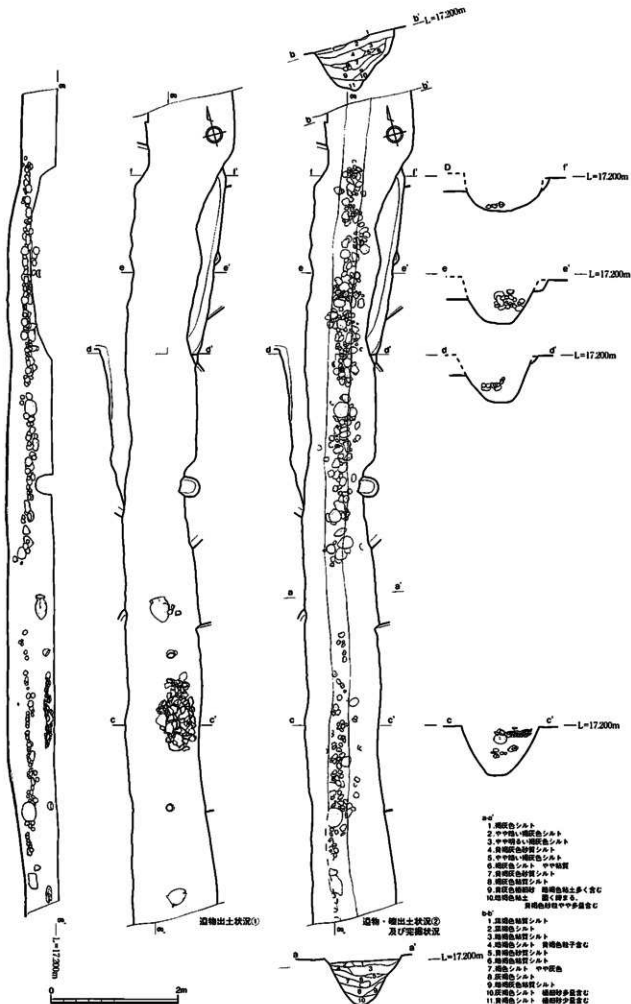
第27図 SH032遺構実測図 (S = 1/60)



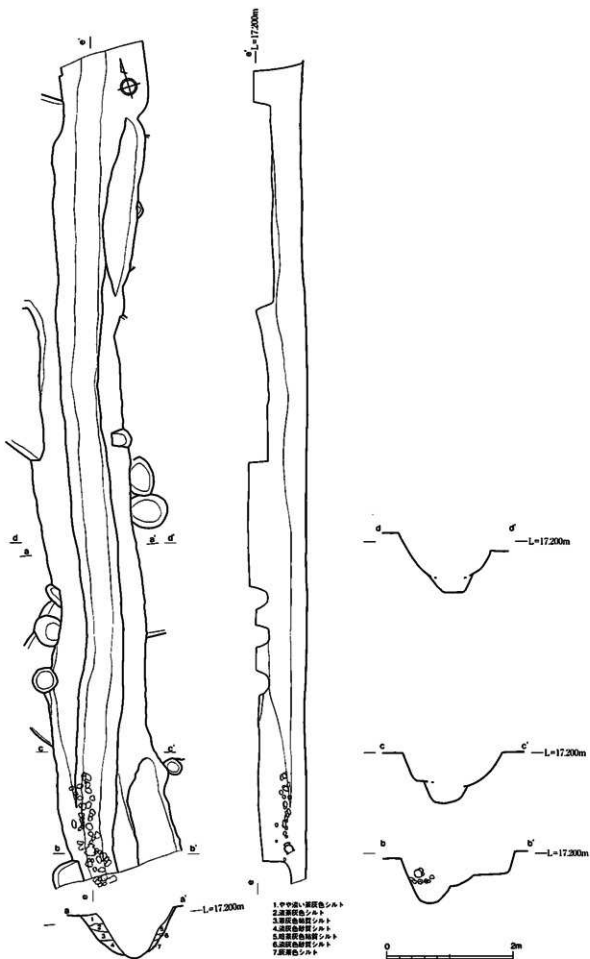
第28図 SH032 (柱穴・焼土坑含む) 出土遺物 (S = 1 / 2・4)



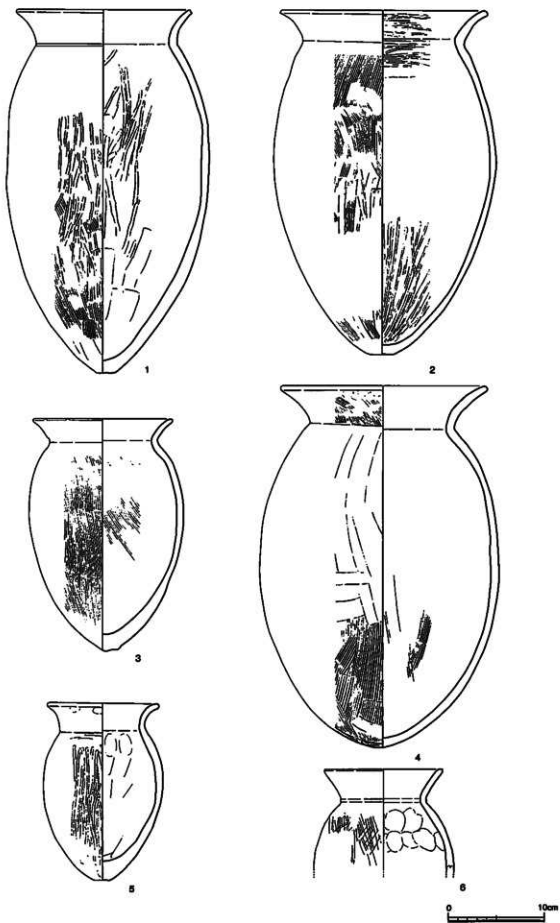
第29図 その他住居 (SH022・062・114) 出土遺物 (S = 1 / 4)



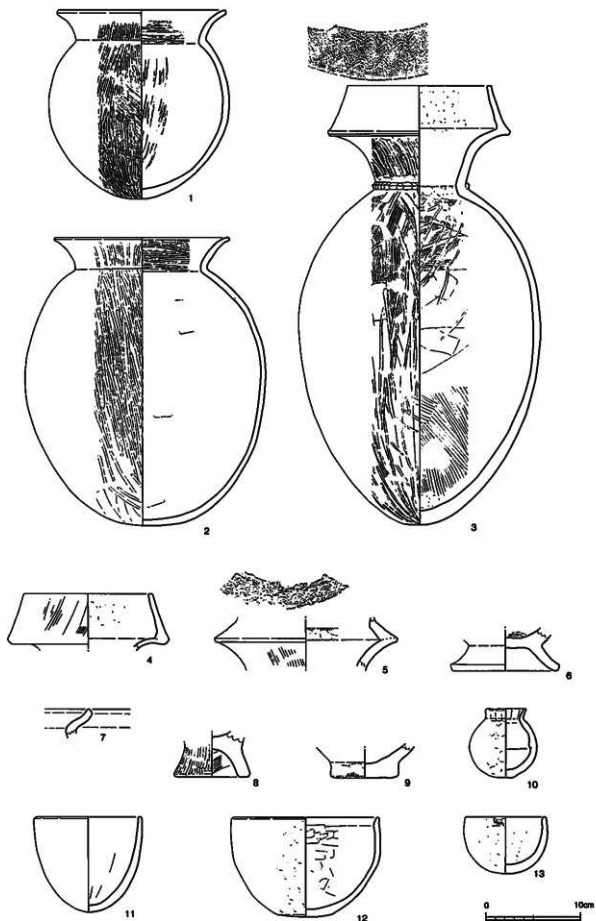
第30図 SD008遺構実測図 (S = 1 60)



第31図 SD095遺構実測図 (S = 1 / 60)



第32図 SD008出土遺物① (S = 1 / 4)



第33圖 SD008出土遺物② (S = 1/4)

溝状遺構

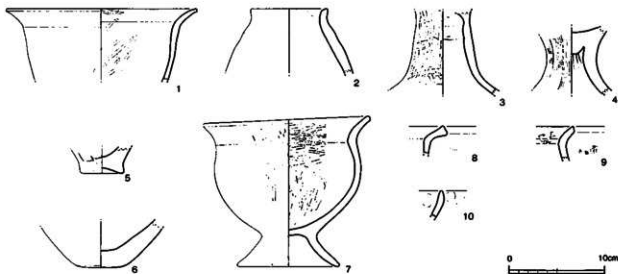
SD008は調査区東側で確認された幅約1.2m・深さ約0.7mを測る南北方向に延びる溝状遺構である。北側・南側とも調査区外に延びるため確認できる長さは約13mである。この溝状遺構の中からは多くの遺物と礫が出土している。礫は拳大の物が多く見られ溝状遺構の下層のほぼ全域で確認された。埋没（廃棄）時入れられたもの若しくは、河原礫が流れ込んだものであると考えられる。礫の中から出土する遺物は10点ほどである。遺物の多くは溝状遺構の南側上層ではばらばら確認されている。溝状遺構の北側の上層は堅穴住居跡 SH018・032によって切られているため、北側での遺物出土量は少量であると考えられる。南側の遺物は完形になるものが含まれる。

溝状遺構 SD008に先行する溝 SD095が検出されている。SD095とはほぼ同位置で大半を重複して、幅約1.4m・深さ約0.8mを測る。SD095はSD008以前に機能していた溝状遺構であると考えられ、SD008は何らかの理由（河川の氾濫？）で埋没してしまったSD095を掘り返して同一地点に造り直されたものであると考えられる。SD008と重複しているため出土遺物は少量である。

今回確認された溝状遺構 SD008は調査区の北側に位置する宮苑井ノ口遺跡第1次調査区で確認された東西方向に延びる1号溝状遺構に接続するものであると想定され、集落を囲む溝状遺構であると考えられる。溝状遺構（SD008）と同様に溝状遺構（1号溝）の東側でも河原礫が流れ込んだのが見られる。また現段階で溝状遺構（SD008・1号溝）に繋がる東端・南端に位置する溝状遺構は確認されていない。

この溝状遺構（SD008・1号溝）の内側に位置する宮苑井ノ口遺跡第2次調査1b区と第4次調査区で確認された堅穴住居跡の一部がこの溝状遺構に伴う集落を形成する可能性が高いと考えられる（第30～34図、遺構写真①1～8・②1～3）。

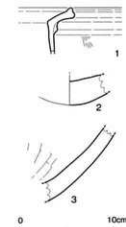
第32図1～6は甕である。いずれもく字形口縁を持つ甕である。1は口径18.0cm、器高38.1cm、胴部最大径21.2cmの長胴甕である。底部は不安定な平底形である。胴部外面に縦方向ハケの後、胴部中央部に縦方向ミガキがやや粗に施される。胴部内面は、下部に縦方向工具ナデ、上部は丁寧なナデ後、縦方向ミガキがやや粗に施される。2は口径21.2cm、器高36.1cmで、底部はレンズ状を呈す長胴甕である。胴部外面に縦方向ハケ。胴部外面下部にはスガが付着し、胴部外面上部に黒斑が認められる。胴部内面の調整は、全体にナデ後、胴下部にはさらに縦方向ミガキが施される。口縁部内面および胴部内面上部には横方向の暗文状ミガキがやや密に施される。3は口径14.4cm、器高24.4cmの小型甕で、底部はレンズ状を呈す。胴部内外面全体にハケメが観察される。胴部外面下半部は被熱により赤色化している。4は口径21.2cm、器高37.9cmの甕で、底部は丸底に近いレ



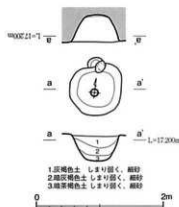
第34図 SD008下層・SD095出土遺物（S=1/4）



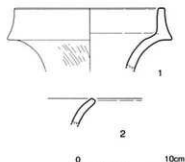
第35図 SK001遺構実測図
(S = 1 / 60)



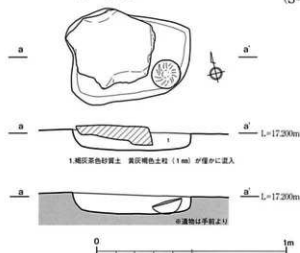
第36図 SK001出土遺物
(S = 1 / 4)



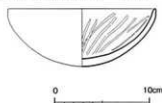
第37図 SK043遺構実測図
(S = 1 / 60)



第38図 SK043出土遺物
(S = 1 / 4)



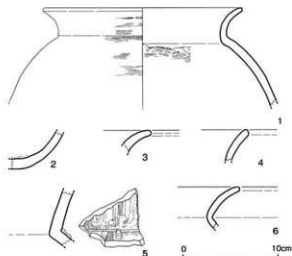
第39図 SK005遺構実測図 (S = 1 / 20)



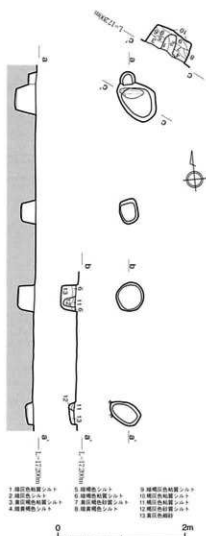
第40図 SK005出土遺物 (S = 1 / 4)



第41図 SK082遺構実測図
(S = 1 / 60)



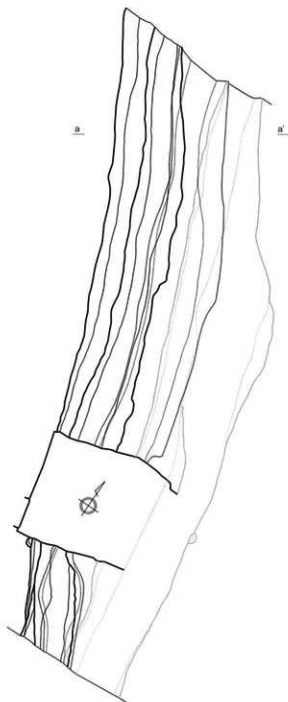
第42図 SK082・084出土遺物 (S = 1 / 4)



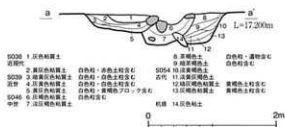
第43図 SA090遺構実測図
(S = 1 / 60)



第44図 SA090出土遺物 (S = 1 / 4)

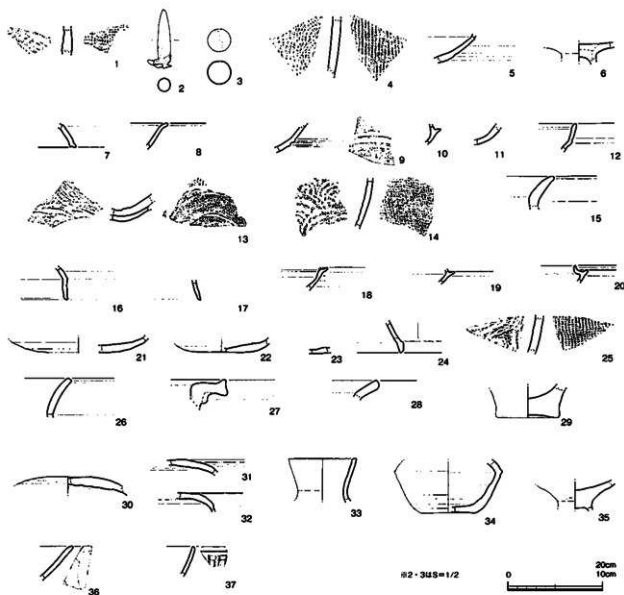


第45図 SD038・039・046・054遺構実測図 (S = 1 / 60)



ンズ状である。胴部外面下部にタテハケ、外面上部にはナデ。口縁部外面には細かい左上がりのハケを施す。胴部内面はハケ後ナデを施す。5は口径11.4cm、器高18.6cm、底部レンズ状の小型甕である。胴部外面全体にタテハケ調整のち、縦方向ミガキを施し、外面中位に黒斑及びスガが観察される。胴部内面には工具ナデが施される。6は口径12.2cm、残存器高10.8cmの小型甕上半部破片である。

第33図1、2は広口甕である。1はタテ方向の細かいミガキを密に施し、底部の器壁がやや肥厚する。赤色顔料が内外面の一部に付着しており、内面には比較的良好に朱が残存している。本来丹塗りの甕であった可能性がある。2は1とはほぼ同口径であるが、胴部がやや長く、底部付近にナデ痕跡が残る。外面全面と口縁部内面に丹塗りが施される。胴部、口縁部外面全体に縦方向ミガキが密に施される。口縁部内面には横方向ミガキが密に施される。3は安国寺式系複合口縁甕である。倒卵形胴部で、頸部と胴部の境界に断面三角形の突帯が一条巡らされる。口縁部外面には2条の櫛描波状文が施される。外面は細かいタテハケ調整のち縦方向磨きを暗文状に施す。4、5は複合口縁甕の口頸である。6は台付鉢の台部、7～9は甕破片である。10は手捏ね成形の小型甕である。ミニチュア土器か。11～13は丸底の鉢である。11は摩耗が著しいが、内面に工具ナデ痕跡が残る。12は口縁端部をつまみ上げて成形する。内面に横方向工具ナデ、外面にユビオサエ痕が観察される。13は小型で、内



第46図 水田部溝状遺構 (SD007・028・038・039・046・054)・水田出土遺物 (S=1 2・4)

外面表面にユビオサエ痕が残る。

第34図1～6はSD008下層出土遺物である。1は鉢で、内外面に暗文状ミガキを施す。2は短頸壺、3は高坏脚部である。柱状を呈し、外面に暗文状ミガキを密に施す。4は高坏脚部である。外面に縦方向のハケメ調整が残る。5、6は壺底部である。SD008下層出土遺物は、SD008の最終埋没段階と想定される、上層出土遺物との明確な時期差が認められない。SD008に先行するSD095の出土遺物も、7の台付鉢など、SD008上層出土遺物との時期差はほとんど認められない。現在の土器編年からは、SD095の埋没後、SD008が掘削されるが、短期間に埋没してしまう遺構と考えられる。

土坑

SK001

調査区のはずれ中央で確認されたSK001は、長軸約1.3m・短軸約1.2m・深さ約0.3mを測る円形土坑である(第35・36図、遺構写真④)。

第36図1は弥生土器壺である。口縁部と胴部の堺に断面三角形貼付突帯を施す。2、3は弥生土器壺破片である。2はやや底部が肥厚する九底の壺と考えられる。

SK043

調査区東側で確認されたSK043は、直径約0.8m・深さ約0.4mを測る円形土坑である(第37・38図)。第38図1は複合口縁破片である。口縁部外面はヨコナデ、頸部外面はハケ後ヨコナデを施す。

円形土坑SK001・043は共に基盤となる地山が砂質であり水溜めは不可能である。土採り土坑である可能性も考えられるが、使用用途は不明である。このほかにも円形土坑を確認しているが円形土坑SK001・043と同じく使用用途は不明である。

SK005

調査区東側で確認されたSK005は長軸約0.6m・短軸約0.5m・深さ約0.1mを測る小型土坑である。一辺約0.4m・厚み最大約0.1mを測る石と内面にミガキ痕のある土師器鉢が出土している。石は設置されており、境界を示す可能性が考えられる(第39・40図、遺構写真⑤7～8・⑥1)。

第40図はSK005出土土師器鉢である。内面に放射状に暗文風のミガキを施す。胎土は精良で、やや暗い赤褐色を呈する。外面はやや摩滅するが、残存部の観察から、全面に丁寧なナデを施すようである。

調査区北西側で確認されたSK082は長軸約2.7m・短軸約1.6+αm・深さ約0.4mを測る不定形の大形土坑である。今回確認された微高地部分の西端に位置し、西側を溝状遺構によって消失しているため全容・用途は不明である(第41・42図)。

第42図1は口縁部がやや強く外反するく字形口縁壺である。外面にはヨコハケまたは横方向の強い工具ナデを施す。2は壺底部破片である。3、4は壺口縁部破片である。内外面ともナデ調整で仕上げる。5は口縁部、胴部の境界部に縦方向の浮文を有する壺である。

このほかにも円形土坑を確認しているが、使用用途は不明である。

また調査区南東側において遺構の基盤層(包含層SX015)掘下げ後に不定形プランSX094・098等を確認しているが使用用途は不明である。

柱穴列

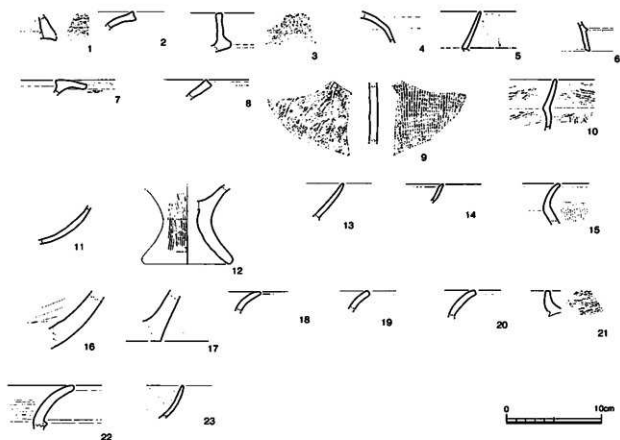
調査区北東側で確認されたSA090(a～d)は、一間約1.6mを測る柱穴列である。土層観察より柱痕も確認されている。横列若しくは建物跡の一部になると考えられる(第43・44図、遺構写真⑥2)。

第44図1は土師器壺の口縁部片である。内面に横方向のミガキを密に施す。2は須恵器坏蓋の口縁部片である。

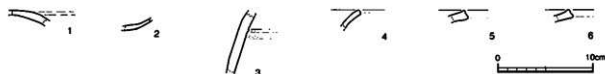
低地(水田域)

SD006・028・038・039・046・054は微高地(住居域)と低地(水田域)の境に位置する南北方向に延びる溝

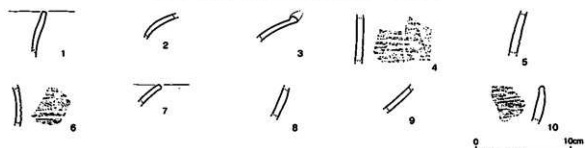
状遺構である。北側・南側とも調査区外にさらに延びている。古代からはほぼ同位置で踏襲され、水路として利用されていたと考えられる。改変毎に西側へと移動しており、近代になると水路の規模は若干縮小され旧時代の水路部分は道路へと改変されている。SD007・028にはこの改変時に使用されたと考えられる人頭大の礫が多く見られる。一部は沈み込み下層の溝状遺構にも達する。区画整理事業前の使用道路下に位置することから、地形に合わせた地割りが現代まで踏襲されていたのが確認された。また SD039に接続し東西方向に延びる溝状遺構 SD 013は引き込み水路であると考えられる。SD013の北側及び、SD039の西側でそれぞれの溝状遺構に沿うように畦畔の痕跡を確認している。SD013を境として南北で水田使用面に差が見られる。旧地形に合わせるように北側



第47図 その他遺構 (SX003・SP014・SP016・SX019・SP029・SP056・SP057・SX061・SP076・SX083・SP089・SK091・SK092・SK101・SD102) 出土遺物 (S = 1 4)



第48図 包含層 (SX015・100) 出土遺物 (S = 1 4)



第49図 縄文土器 (SD008・015・SH020・SK022・SK023・SD028・SD039・表土) (S = 1 4)

が高く南側が低い(第45・46図、遺構写真③3～4)。

第46図1～3はSD007出土遺物である。1は須恵器甕である。外面に平行タタキ、内面に同心円状当て具痕が見られる。2は中心部が鉛製、外表部が青銅の銃弾である。基部が破損している。現存長3.1cm、断面はほぼ円形で、厚さ0.7cm、重さ7.7gである。3は鉛製の鉄砲玉である。球形を呈し、直径1.2cmを測る。重量9.5g。第45図4～6はSD028出土遺物である。4は外面に平行タタキが観察される。内面には同心円状当て具痕が観察される。5は須恵器杯の体部片である。6は土師器高坏である。内面に黒斑が存在する。内外面にナデを施す。7と8はSD038出土遺物である。7は須恵器坏蓋である。外面に回転ヘラケズリの回転ナデ、内面は回転ナデを施す。8は青磁碗である。9は須恵器高坏坏部か。外面に削りだし突帯が2条平行に走る。突帯の下位に櫛波状文が施される。10は須恵器坏身受け部である。11は須恵器坏身か。12は須恵器壺またはハソウ口縁部である。13は須恵器甕破片が上、須恵器坏蓋が下に融着している資料である。14は須恵器甕である。外面に平行タタキ、内面に同心円状当て具を施す。15は土師器甕か。内外面ともにナデする。16～29はSD046出土遺物である。16、17は須恵器坏蓋である。18～23は須恵器坏身である。24は須恵器高坏脚部である。方形透孔が穿孔される。25は須恵器甕体部破片である。外面に平行タタキ、内面に同心円状当て具痕がある。26は土師器甕である。内外面共にナデが施される。27は土師器甕である。口縁部屈曲部に断面方形の貼付突帯を巡らす。28は弥生土器甕口縁部破片である。29は弥生土器平底甕の底部である。30～37はSD054出土遺物である。30、31、32は須恵器坏蓋である。内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ後ナデを施す。33は須恵器壺。34は須恵器甕胴部である。35は土師器高坏である。36、37は水田出土遺物である。36は龍泉窯系青磁碗である。外面に鍋蓋弁。37は肥前系陶器碗である。唐津産か。外面に幾何学文を陰刻する。

第47図1、2はSX003出土遺物である。1は複合口縁部の口縁部で、外面に櫛波状文を施す。2は甕の口縁部か。3はSP014出土の複合口縁部の口縁部である。外面に2条の櫛波状文を施す。4はSP016出土須恵器坏蓋である。5、6はSX019出土遺物である。5は小型壺口縁部である。口縁部外面に縦方向向きを施す。6は須恵器坏蓋である。7はSP029出土の弥生土器鋤先状口縁の壺または高坏である。8はSP056出土甕口縁部破片である。9は須恵器甕胴部片である。外面に平行タタキ、内面に同心円状当て具痕を丁寧にナデ消す。10はSP057出土土師器小型九底甕である。内外面に密にミガキを施す。11はSX061出土遺物である。12はSP076出土遺物である。13、14はSX083出土遺物である。15はSP089出土須恵器である。期種は不明。16～18はSK091出土遺物である。16は弥生土器壺、17は同甕、18は土師器甕である。19はSK092出土土師器甕である。20、21はSK101出土遺物である。20は土師器甕、21は弥生土器壺である。22、23はSD102出土遺物である。22は弥生土器甕、23は土師器鉢で、内面に暗文風ミガキが施される。

今回調査地部分の西端で確認されている住居跡等の遺構の一部が水田に伴う溝状遺構により欠損していることより、これらの住居機能時は微高地と低地の境は今より西側に位置していたと考えられ、水田開発時に微高地部分から低地部分へと続く緩やかな斜面地も水田の作られる低地部分へと改変されたと考えられる。

今回の調査で溝状遺構(水路)と道がセットで確認できたのは近代以降であるが、当初より溝状遺構と道(畦畔)がセットで存在していた可能性が考えられる。

またこの各溝状遺構と対応するようにサブトレンチ及び試掘トレンチの土層観察より近代から古代の水田跡であると考えられる、各層を確認している。今回の調査区からは住居跡と同時代の水田跡及びそれに伴う溝状遺構等は確認されなかった。このことより住居機能時は微高地部分が今回確認されたものより大きく当地点は水田域でなく住居域が展開していた可能性が考えられるものである。北側に位置する第2次調査1a区では、住居域からある程度距離をもって水田域が確認されていることから当地点においても同様の条件で展開していると推測することができる。

第4章 まとめ

今回の調査によって周辺調査区で確認されている一連の微高地部分の西端が確認されたことにより、この微高地のおよその大きさを推測することが可能となった。

微高地の北端を第2次調査1a区、南端を第2次調査1b区、東端を第4次調査区、西端を今回の第5次調査区で確認された地点とすると南北約65m、東西約55mの不整形形状の微高地が想定される（第4図）。これは河川によって形成された島状微高地と仮定した場合であるが、後世の開発等により地形が改変されている可能性も完全に否定することはできないので想定規模より大きい場合や他の微高地と一連となる可能性も考えることができる。また第2次調査1a区で確認された低地部分は今回確認された低地部分と比較して浅く緩やかであり北側の丘陵から派生した舌状微高地の一部であった可能性も考えられる。このほかにも宮苑井ノ口遺跡と東側に位置する賀来西遺跡には河川沿いの自然堤防や微高地が数箇所存在したものであると想定される。これらの部分の多くも水田に改変されているものと考えられる。

当微高地上では弥生時代中期初頭頃から古墳時代後期の堅穴住居跡や、弥生時代後期後葉頃から古墳時代前期の埴輪墓群などが、これまでの周辺調査で確認されている。今回の調査ではこの一連の微高地上で古墳時代後期の堅穴住居跡や弥生時代後期の南北方向に延びる溝状遺構（第5次SD008、095）が確認された。この溝状遺構（第5次SD008）は北側に位置する第1次調査区で確認された、東西方向に延びる溝状遺構（第1次1号溝）と接続する溝と考えられる。溝状遺構（第1次1号溝）は西側で南方向に向けて曲がっており、ちょうど溝状遺構（第5次SD008、095）の北側延長線上に位置することから、ここに接続するものであると想定される。また第1次1号溝の東側は調査区内では曲がらないものの、南側に向けて緩やかにカーブを描き始めており南側に向けて曲がる兆候が見られる。現状で溝状遺構（第1次1号溝）は東西方向31.6m、溝状遺構（第5次SD008、095）と溝状遺構（第1次1号溝）の接続部分までを含めて南北約20mを測る。また第2次調査1b区、第4次調査区ではこの溝状遺構に接続する遺構は確認されていないため南限・東限は確定できないが、地形的制約を受け、この溝状遺構が方形で閉じると仮定すると東西約45m以上、南北約50m以上の長方形プランの区画となる。ただし、南側の地形が急激変化をすれば方形に完結しない可能性も残されている。

これまで、宮苑井ノ口遺跡は4次にわたる発掘調査が実施されているが、今回の第5次調査によって、弥生時代後期末古相段階に埋没する環濠あるいは区画溝の存在が確認できた。この遺構は限定的な期間に機能した施設で、宮苑井ノ口遺跡の変遷を検討する上で大きな画期となる遺構と捉えられる。これまでの発掘調査報告書で検討されてきた変遷案に今回の第5次調査で得られた新知見を加え、宮苑井ノ口遺跡の変遷について新たに検討することとする。ただし、宮苑井ノ口遺跡の堅穴住居跡では、総じて遺物が良好な出土状況を示さず、層位年代、並行関係が確定できない遺構も多く、並行関係および時期毎の集落像が焦点を結ばないきらいがある。

後期後葉頃

環濠（区画溝）が掘削される地点以北、以西に居住域が存在する。後期後葉段階に土器棺墓群が形成される。この段階のものは第1次5号、7号、12号「カメ棺墓」である。堅穴住居では弥生時代後期後半頃の遺物が出土する、第1次2号住居跡が存在する。環濠（区画溝）との新旧関係は、切りあい状況からは不明であるが、先行する可能性がある。また、第1次1号住居跡は、後期後葉の土器棺墓である12号「カメ棺墓」、後期末から古墳時代初頭の3号「カメ棺墓」に切られており、当該期に比定できる。

また、第4次SH070、SH090、SH120、第5次SK101、SX062、SX082、SX113は出土遺物が小片であるため明確な時期決定は困難であるが、この時期に所属する可能性がある。確実にこの段階に比定できるのは第1次1号堅穴住居跡、第1次5号、7号、12号「カメ棺墓」のみであるが、環濠（区画溝）掘削前の居住域は、環濠（区画溝）によって規定される範囲の以北、以西にも展開していたようである。

環濠（区画溝）は、後述するように掘削時期の上限が不明確なため、この時期に環濠（区画溝）が存在したことも想定可能である。その場合、集落の外縁を巡る外環濠ではなく、内環濠と考えられ、集落像としては大きな差異が生じることとなるが、第5次調査を含め、これまでの発掘調査からはその位置づけが不可能である。今後の近隣地点の調査による確定を今後の課題としたい。

後期後葉～後期末

環濠（区画溝）の帰属年代については、第1次1号溝は本文中では後期前葉から中葉頃に位置づけられているのに対し、第5次調査SD008、095からは、本書で報告したように後期末古相の遺物群が一括廃棄されて出土した。第1次1号溝出土遺物は出土状況が必ずしも良好ではなく、遺物出土量も少量であることから、環濠の帰属年代は後期末古段階に最終的に埋没したものと推測される。SD008とSD095は重複するが、SD095出土遺物とSD008出土遺物には時期差が看取されない。少なくとも、後出するSD008は後期末古段階の限定された期間に形成され、埋没した遺構と想定できる。ただし、SD095の掘削時期の詳細は出土遺物、遺構の新旧関係からは不明であるため、環濠（区画溝）の上限は不明である。

同時期の土器棺墓群が、環濠の内と外で検出されている。環濠外の土器棺墓群は赤色顔料の分布する小空間を伴い、環濠埋没以前の後期後葉段階から墓域として存在し、古墳時代前期まで存続している。これに対して、環濠内には1基のみ検出されている。解釈として、1. 環濠外の墓域が環濠の機能した段階でも変わらず踏襲された、とする解釈と、2. 外の墓域は環濠の存続期間（後期末古段階）に機能を停止し、環濠の内側に新たな墓域（後期末古段階）が形成されるが、環濠埋没後（後期末古段階以降）に従来の墓域が再開される、とする解釈ができるだろう。

当該期に比定される遺構として、第1次1号溝・第5次SD008、SD095の区画内に位置する第4次SH070、SH090、SH120が並行しうが、出土遺物量、出土状況に限界があるため、この前段階に存在した可能性もあり並行関係については確定できない。

後期末から古墳時代前期

環濠（区画溝）が埋没し、その跡地に堅穴住居群が展開する時期である。第5次調査区ではこの時期に帰属する遺構が展開し、第1次調査区でも同様の様相が確認されている。前段階の堅穴住居に比べると、第5次SH024のように、この時期の堅穴住居の遺物出土状況は良好である。出土遺物、切りあい状況より、この時期に比定される堅穴住居は第5次調査区をはじめとして、複数検出された。時期幅が長いので、多くの遺構がこの時期に帰属することとなるが、居住域がこの時期に拡大している可能性がある。この時期に帰属する遺構は、第5次SK005、SH018、SH027、SH024、SD102、SH021、SH010、SH025、SK097、SX026である。他の調査区では、第4次SH060・075・095・105・115、第1次第3号堅穴住居、第2、4、8、11、3号土器棺墓が挙げられる。

古墳時代中期後半～中期末

第4次SH025・030・040・100・115、第5次SX019・SH032が挙げられる。前期に比べ、居住域はやや縮小し、東寄りになる。

第5次調査区で確認された古墳時代前期から中期の堅穴住居群は、当該期の集落の西端であると考えられる。微高地の南半部に拡大展開した堅穴住居であるが、微高地北半部における展開は古墳時代には僅かであり、前期から中期にかけて、居住域が少しずつ南寄りに移動する状況も呈する。

古墳時代後期

第4次SH010・020・045・055・065、第5次SX022、SK083が挙げられる。居住域の範囲は中期と大きく変わらないようである。

古代以降

第4次SB005、第5次SA090が挙げられる。第4次SB005は南北棟の掘立柱建物跡である。第5次SA090も

南北方向の柱穴列である。主軸方向がほぼ同じであり、近い時期の遺構となる可能性があるが、両遺構とも明確な帰属時期は不明である。また、この時期には居住域の西端に水田が開発されるようである。第5次調査では、微高地部分の西端で確認できた竪穴住居跡等の遺構の一部が水田に伴う溝状遺構により削平されていることより、これらの遺構（竪穴住居跡）機能時は微高地と低地の境は今回確認された地点より西側に位置していたと考えられ、古代以降の水田開発時に微高地部分から低地部分へと続く緩やかな斜面地及び微高地の一部も水田耕作に適した低地部分へと改変されたものであると考えられる。このことから当時微高地は現在確認推定できる範囲より外側に向けてさらに5～10mほど大きかったと推測される。このことより竪穴住居機能時は当調査区内の全面が微高地部分若しくは斜面地に当たると想定されることから、竪穴住居跡と同時代の水田跡が存在した可能性は低いものであると考えられる。

当時は住居域と水田域は近くに存在していたものと考えられるが、現段階では住居跡からある程度距離を置いた地点で確認することができると想定され、敷地外西側において展開している可能性があるものと考えられる。時代を重ねるごとに、水田として利用できる範囲は拡大し、近世もしくは中世になると、この微高地上も水田開発が行われ集落は北側に位置する丘陵裾部へと集中したものであると考えられる。水田開発時に埋没してしまった他の微高地上にも今回調査を行ったこの微高地と同様に集落が展開する可能性があるものと想定される。

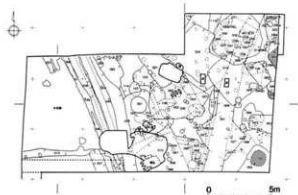
宮苑井ノ口遺跡では、縄文時代後晩期の遺物が出土しており、遺跡の形成はこの時代と考えられるが、最古相の遺構が確認されるのは弥生時代中期初葉である。この段階には、微高地の中央部の限定的な空間で展開する集落（第2次調査1a区南端・第2次調査1b区北端で確認されている）が時代を重ねるごとに拡大し、古墳時代には微高地南半部全体に展開したものであると想定される。ただし、この詳細な過程は遺構、遺物の残存状況が必ずしも良好でない為、判然とせず、この変遷案は仮案に留まる。今後の調査によって、より詳細に、かつ蓋然性の高い案が提出されることによって、この案は克服されるべきである。

最後になるが、今回の第5次調査によって、宮苑井ノ口遺跡の居住域が存在した微高地の範囲がほぼ確定されたのは成果の一つとしてあげられる。周辺の調査によって居住域を含む集落の景観変遷についても復原されることを期待する。

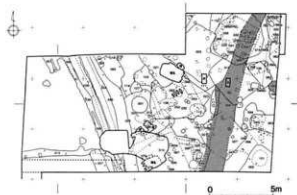
参考文献

- | | | | |
|-----------------|------|---|----------|
| 杉崎重臣・牧野義樹・讃岐和夫 | 1979 | 『野田山遺跡』 | 大分市教育委員会 |
| 真野和夫 | 1979 | 『豊後国分寺跡』 | 大分市教育委員会 |
| | 1980 | 『下黒野遺跡』 | 大分県教育委員会 |
| 大分市史編纂委員会 | 1987 | 『大分市史』上・中巻 | 大分市 |
| 森 政博・讃岐和夫・坪根伸也 | 1992 | 『宮来中学校遺跡』 | 大分市教育委員会 |
| | | 大分市宮来中学校プール建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 | 大分市教育委員会 |
| 讃岐和夫・坪根伸也 | 1993 | 『旧指定史跡 豊後国分寺跡』 | 大分市教育委員会 |
| | | 豊後国分寺跡北西地区発掘調査報告書 | 大分市教育委員会 |
| 高橋 徹・友岡信彦 | 1996 | 『肌原原遺跡 女狐近世墓地 庄ノ原遺跡群』 | 大分県教育委員会 |
| 萩 幸二 | 2004 | 『金谷遺跡発掘調査報告書』 | 大分市教育委員会 |
| | | 大分市西部スポーツ交流広場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 | 大分市教育委員会 |
| 萩 幸二・大野瑞恵・井口あけみ | 2004 | 『宮来西遺跡第1次・第2次発掘調査報告書』 | 大分市教育委員会 |
| | | 大分市都市計画事業宮来西土地地区開発事業に伴う発掘調査報告書 | 大分市教育委員会 |
| 栗田勝弘・山田拓伸 | 2005 | 『宮来西遺跡・宮苑井ノ口遺跡』 | 大分市教育委員会 |
| | | 昭道小供園大分県道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 | 大分市教育委員会 |
| 萩 幸二・井口あけみ | 2005 | 『宮苑井ノ口遺跡第2・第3次発掘調査報告書』 | 大分市教育委員会 |
| | | 大分市都市計画事業宮来西土地地区開発事業に伴う発掘調査報告書 | 大分市教育委員会 |
| 中西武尚・若林善典 | 2008 | 『宮来西遺跡第4次発掘調査報告書』 | 大分市教育委員会 |
| | | マンション建設に伴う発掘調査報告書 | 大分市教育委員会 |
| 奥村義貴 | 2008 | 『玉沢地区集落跡第10・11・12・13・14・16・18・19次発掘調査報告書』 | 大分市教育委員会 |
| | | 大分市横田新都市中央土地地区開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 | 大分市教育委員会 |

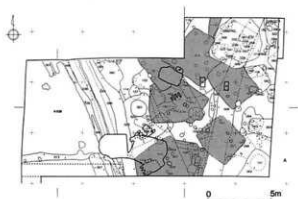
後期後葉



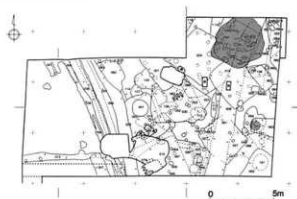
後期後葉～末



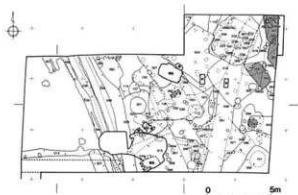
後期末～
古墳時代前期



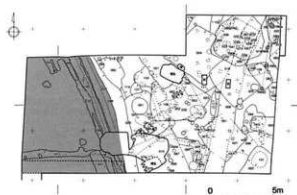
古墳時代
中期後半～中期末



古墳時代後期



古代以降

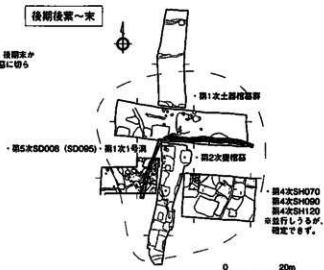


第50図 宮苑井ノ口遺跡第5次調査区変遷図

後期後葉



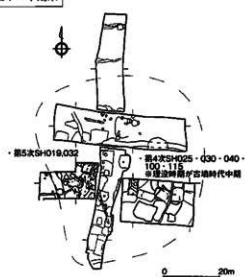
後期後葉～末



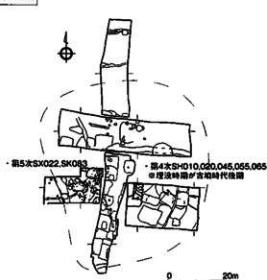
後期末～
古墳時代前期



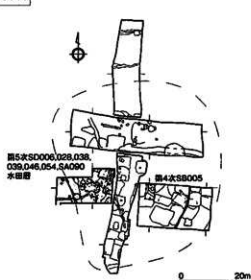
古墳時代
中期後半～中期末



古墳時代後期



古代以降



第51図 宮苑井ノ口遺跡変遷図 (弥生時代後期から中世まで)

表1-1 遺物觀察表①

[illegible]

表1-2 遺物觀察表②

[illegible]

表1-3 滑物觀察表③

船名	(H40年)	船番号	主 機		船主	航 路				船 種		船 長 (mm)		乗組員	備考	
			機関	馬力		内航	内航区	外航	航路記号	内航	外航	口長	幅員			
50002	042904	0166	上級船	重	西行	にんあ・浦賀	浦賀往 4	南航	7.507.6	ヨコナテ ヨコナテ ナナ	ハヤブ ヨコナテ ナナ	120.0	18.0	-	11月20日 浦賀に1回	尾崎茂雄
50002	042904	0122	上級船	重	西行	にんあ・浦賀	浦賀往 3	にんあ・浦賀	浦賀往 3	ナナ ナナ ナナ	ナナ	ナナ	ナナ	-	船没	船主不明
50002	042904	0120	上級船	重	西行	にんあ・浦賀	2.浦賀往 4	南航	浦賀往 3	ヨコナテ	ヨコナテ	ナナ	ナナ	-	11月20日	
50002	042904	0121	上級船	重	西行	にんあ・浦賀	浦賀往 7	3	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	ナナ	ナナ	-	11月20日	
50004	042905	0137	南上級船	重	西行	にんあ・浦賀	浦賀往 2	にんあ・浦賀	浦賀往 7	ナナ	ハヤブ 1号	ナナ	ナナ	-	船没	伊達光弘
50004	042904	0136	上級船	重	西行	にんあ・浦賀	浦賀往 7	3	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	ナナ	ナナ	-	11月20日	内航に浦賀あり
54000	043001	0140	上級船	中・小	西行	にんあ・浦賀	浦賀往 6	往	5.076.6	1号	ヨコナテ	ナナ	ナナ	-	11月20日	
54000	043002	0141	上級船	中・小	西行	にんあ・浦賀	浦賀往 3	往	5.076.6	1号	ヨコナテ	ナナ	ナナ	-	11月20日	
50007	043004	0094	船形	重	西行	にんあ・浦賀	浦賀往 7	3	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	ナナ	ナナ	-	11月20日	
50007	043004	0094	船形	重	西行	にんあ・浦賀	浦賀往 7	3	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	ナナ	ナナ	-	11月20日	
50007	043004	0097	西行船	重	西行	にんあ・浦賀	浦賀往 7	3	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	ナナ	ナナ	-	11月20日	
50007	043004	0098	西行船	重	西行	にんあ・浦賀	浦賀往 7	3	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	ナナ	ナナ	-	11月20日	
50008	043005	0055	船形	中	西行	にんあ・浦賀	浦賀往 7	3	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	ナナ	ナナ	-	11月20日	
50008	043005	0055	船形	中	西行	にんあ・浦賀	浦賀往 7	3	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	ナナ	ナナ	-	11月20日	
50008	043005	0056	船形	中	西行	にんあ・浦賀	浦賀往 7	3	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	ナナ	ナナ	-	11月20日	
50008	043005	0057	船形	中	西行	にんあ・浦賀	浦賀往 7	3	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	ナナ	ナナ	-	11月20日	
50008	043005	0058	船形	中	西行	にんあ・浦賀	浦賀往 7	3	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	ナナ	ナナ	-	11月20日	
50008	043005	0059	船形	中	西行	にんあ・浦賀	浦賀往 7	3	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	ナナ	ナナ	-	11月20日	
50008	043005	0060	船形	中	西行	にんあ・浦賀	浦賀往 7	3	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	ナナ	ナナ	-	11月20日	
50008	043005	0061	船形	中	西行	にんあ・浦賀	浦賀往 7	3	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	ナナ	ナナ	-	11月20日	
50008	043005	0062	船形	中	西行	にんあ・浦賀	浦賀往 7	3	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	ナナ	ナナ	-	11月20日	
50008	043005	0063	船形	中	西行	にんあ・浦賀	浦賀往 7	3	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	ナナ	ナナ	-	11月20日	
50008	043005	0064	船形	中	西行	にんあ・浦賀	浦賀往 7	3	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	ナナ	ナナ	-	11月20日	
50008	043005	0065	船形	中	西											

表2-1 遺構一覧表①

S番号	種別	詳細関係(西-古)	地区	時期	所見
SK001	円形土坑	-020	B3・4	弥生時代後期末	
SH002	竪穴住居(遺物)跡	—	A6	弥生時代後期～古墳時代前期	
SK003	方形土坑	-091	A・B6	古墳時代中期以降	
SP004	ビット	-006	A4	—	
SK005	小堀土坑	-018	B6	古墳時代前期前部	
SK006	溝状遺構	-039	A・B3・2/C2	近現代	水路
SD007	溝状遺構	-013	A3	近現代	
SD008	溝状遺構	-018・027	A・B・C5/B・C・D6	弥生時代後期末古墳	
SP009	ビット	-010	A4	—	
SH010	竪穴住居(遺物)跡	-097	A4・5	古墳時代前期か	
SP011	ビット	-019	C5	—	
SP012	ビット	-020	B4	—	
SD013	溝状遺構	—	A1・2・3	近現代	引き込み水路
SK014	土坑	-022	D6	弥生時代後期後部～末	
SK015	遺構基礎・包含層	—	麻高亀倉	古墳時代前期	鉄製灰色砂質土
SP016	ビット	-020	C6	古墳時代前期か	
SK017	小堀土坑	-026	A5	—	
SH018	竪穴住居(遺物)跡	-024	B・C5・6	古墳時代前期	
SK019	円形土坑	-032・102	C・D5・6	古墳時代中期末	たまり
SH020	竪穴住居(遺物)跡	-001・114	A・B3・4	弥生時代後期前期	
SH021	竪穴住居(遺物)跡	-023・103	B・C4	古墳時代前期	
SK022	不規則土坑	-062・069・083・100	C・D6	古墳時代後期	竪穴住居(遺物)跡の一部か
SK023	不規則土坑	-020・103・109・111・112	B・C4・5	弥生時代後期後部	鉄製ブロン・3種の竪穴住居(遺物)跡に全層
SH024	竪穴住居(遺物)跡	-021・102・111	C4/B・C・D5	古墳時代前期後部	
SH025	竪穴住居(遺物)跡	—	A4・5	古墳時代前期	
SK026	不規則土坑	-038・027	A4・5/B4	古墳時代前期	
SH027	竪穴住居(遺物)跡	-031・047	A・B5・6	古墳時代前期か	鉄製ブロン・2種の竪穴住居(遺物)跡に全層
SD028	溝状遺構	-082・084	A・B・C3/B・C2	近現代	
SP029	ビット	—	A6	弥生時代後期	
SH030	竪穴住居(遺物)跡	-106・109・112	B・C4・5	弥生時代後期～古墳時代前期	
SP031	ビット	-027	D6	—	
SH032	竪穴住居(遺物)跡	-019	C・D5・6	古墳時代中期末	遺構A・竪穴・竪土
SP033	ビット	-041	C5	—	
SP034	ビット	-050・061	C6	古墳時代中期末	SH032(上面)の主柱穴
SK035	小堀土坑	—	C5	古墳時代中期末	SH032(上面)の土坑(機土)
SP036	ビット	—	C6	古墳時代中期末	SH032(上面)の主柱穴
037	欠番	—	—	—	—
SD038	溝状遺構	-039・046	A3/B・C2・3	近世	水路
SD039	溝状遺構	-046・本川井	A3/B・C2・3	近世	水路
040	欠番	—	—	—	—
SP041	ビット	—	C5	古墳時代中期末	SH032(上面)の主柱穴
SP042	ビット	—	D5	古墳時代中期末	SH032(上面)の主柱穴
SK043	土坑	-094	B6	古墳時代中期	
SP044	ビット	-025・026	A5	—	
045	欠番	—	—	—	—
SD046	溝状遺構	-028	A・B3/C2・3	中世	水路
SP047	ビット	-008	A5	—	SH027の主柱穴
SP048	ビット	—	A5	—	SH027の主柱穴
SP049	ビット	—	A6	—	SH027の主柱穴
050	欠番	—	—	—	—
SP051	ビット	-008	B5	古墳時代前期か	SH027の主柱穴
SP052	ビット	—	B4	弥生時代後期～古墳時代前期	SH030の主柱穴
SP053	ビット	—	B5	弥生時代後期～古墳時代前期	SH030の主柱穴
SD054	溝状遺構	-046	A2・3/B・C3	古代	水路
055	欠番	—	—	—	—
SP056	ビット	—	C5	—	—
SP057	ビット	-073	C6	—	—
SP058	ビット	-008	C6	—	—
SP059	ビット	-082・084	C6	—	—
060	欠番	—	—	—	—
SK061	たまり	-008	C6	—	—
SK062	竪穴住居	-100	C6	弥生時代後期	竪穴住居(遺物)跡か
SP063	ビット	-089	C6	—	—
SP064	ビット	—	A4	古墳時代前期	SH025の主柱穴
065	欠番	—	—	—	—
SP066	ビット	-010	A4	古墳時代前期	SH025の主柱穴
SP067	ビット	-010	A4	古墳時代前期	SH025の主柱穴
SP068	ビット	—	C5	古墳時代中期	SH032(下面)の主柱穴
SP069	ビット	—	C6	古墳時代中期	SH032(下面)の主柱穴
070	欠番	—	—	—	—
SP071	ビット	—	D5	古墳時代中期	SH032(下面)の主柱穴
SP072	ビット	—	C6	古墳時代中期	SH032(下面)の主柱穴
SK073	小堀土坑	—	C6	古墳時代中期	SH032(下面)の土坑(機土)
SP074	ビット	-082	C3	—	—

表2-2 遺構一覧表②

S番	遺 構	新旧関係(新-古)	施 区	時 期	所 見
075	欠番	—	—	—	—
SP076	ピット	~114	C3	—	—
077	欠番	—	—	—	—
SP078	ピット	—	A4	古墳時代前期か	SH010の主柱穴
SP079	ピット	—	A4	古墳時代前期か	SH010の主柱穴
080	欠番	—	—	—	—
SK081	土坑	~074	A4	—	—
SX082	不整形土坑	~090・092	B・C3	弥生時代後期後遺期か	—
SX083	たまり	~082	A・B6	古墳時代前期か	—
SK084	土坑	—	C6	弥生時代後期後遺期	082と同一か
085	欠番	—	—	—	—
SP086	ピット	—	B4	—	SH020の主柱穴
SK087	土坑	~030	B4	古墳時代前期前期か	SH030の土坑(礎土)か
SP088	ピット	~111	B4	—	SH030の主柱穴
SP089	ピット	—	C6	—	—
SA090	柱穴列	~022・083・106	B・C・D6	古代か	北からa・b・c・d、排列または遺物群
SK091	土坑	~096	B6	弥生時代後遺期	—
SK092	土坑	~083	C6	弥生時代後期から古墳時代前期	—
SP093	ピット	~022	D6	—	—
SX094	不整形プラン	~100	B6	—	—
SD095	溝状遺構	~113	A・B・C5/B・C・D6	弥生時代後期後遺期~遺期末か	SD008の下位
SK096	土坑	~100	B6	—	—
SX097	竪穴遺構	~025	A4・5	古墳時代前期か	竪穴住居(建物)跡か
SX098	不整形プラン	~100	A6	—	—
SP099	ピット	~025	D5	—	—
SX100	包舎跡	~100	C・D6	弥生時代後期から古墳時代前期	—
SK101	土坑	—	A6	弥生時代後期後遺期	—
SD102	溝状遺構	—	C・D5	古墳時代前期	—
SK103	土坑	—	B3・4	—	—
SP104	ピット	—	B5	—	—
105	欠番	~106・114	—	—	—
SK106	土坑	~082	B4	—	礎土
SK107	土坑	—	B3・4	—	—
SK108	土坑	—	C6	—	—
SK109	土坑	~106	B4	—	—
110	欠番	—	—	—	—
SH111	竪穴住居(建物)跡	~030	B5	弥生時代後期~古墳時代前期	—
SK112	土坑	—	B5	—	—
SX113	方形土坑	—	B5	弥生時代後期後遺期か	竪穴住居(建物)跡か
SK114	土坑	—	B・C3・4	弥生時代後期	竪穴住居(建物)跡か
115	欠番	—	—	—	—
SX116	土坑	—	D5	—	竪穴住居(建物)跡か
SP117	ピット	—	C5	—	—

遺構写真①



1. SD008遺物出土状況（南方向より）



2. SD008遺物出土状況近景①（南東方向より）



3. SD008遺物出土状況近景②（南西方向より）



4. SD008北側礫・遺物出土状況（南方向より）



5. SD008南側礫・遺物出土状況（南方向より）



6. SD008南側土層観察状況（南方向より）



7. SD095南側礫・遺物出土状況（南方向より）



8. SD095土層観察状況（南方向より）

遺構写真②



1. SD008完掘状況
(南方向より)



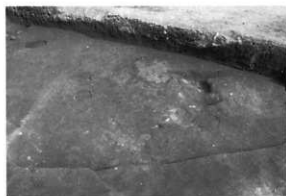
2. SD095完掘状況
(南方向より)



3. SD095南側壁・遺物出土状況 (北方向より)



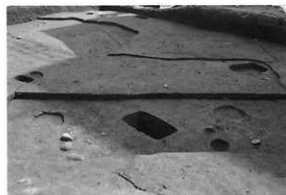
4. SH002完掘状況 (北東方向より)



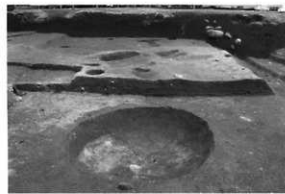
5. SH010床面検出状況 (北西方向より)



6. SH010貼床土層観察状況 (北西方向より)



7. SH018土層観察状況 (南方向より)

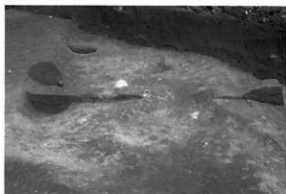


8. SH020土層観察状況 (北西方向より)

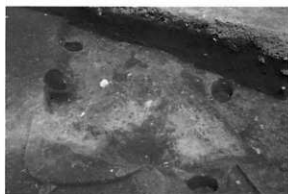


9. SH020完掘状況 (北西方向より)

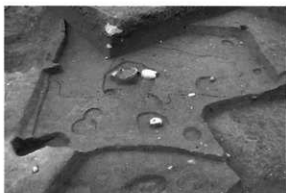
遺構写真③



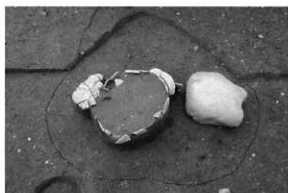
1. SH021土層観察状況（南東方向より）



2. SH021完掘状況（南東方向より）



3. SH024遺物出土状況（南東方向より）



4. SH024遺物出土状況近景（南東方向より）



5. SH024遺物下土層観察状況（南東方向より）



6. SH024完掘状況（南東方向より）



7. SH025土層観察状況（西方向より）

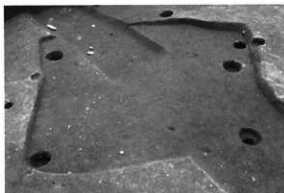


8. SH025完掘状況（西方向より）

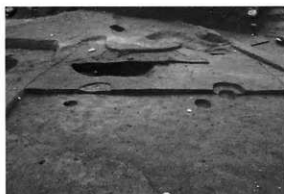
遺構写真④



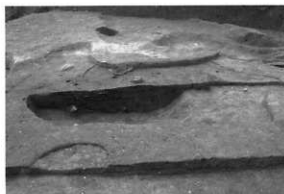
1. SH027土層観察状況（北東方向より）



2. SH027完掘状況（北東方向より）



3. SH030土層観察状況（南東方向より）



4. SK087土層観察状況（南東方向より）



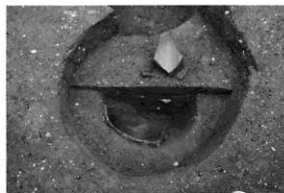
5. SK087遺物出土状況（南東方向より）



6. SH030完掘状況（南東方向より）



7. SH032土層観察状況（南西方向より）



8. SH032柱穴（SP069）遺物出土状況（南西方向より）

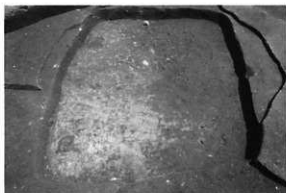
遺構写真⑤



1. SH032上面完掘状況（南西方向より）



2. SH032貼床土層観察状況（南西方向より）



3. SH032完掘状況（南西方向より）



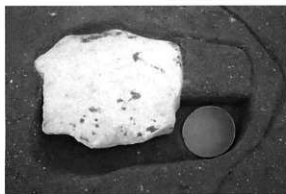
4. SK001土層観察状況（北方向より）



5. SK082・084土層観察状況（南方向より）



6. SK082完掘状況（南方向より）

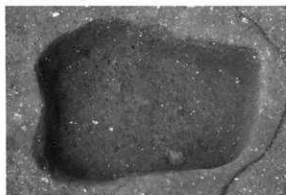


7. SK005遺物・石出土状況（南方向より）



8. SK005土層観察状況（南方向より）

遺構写真⑥



1. SK005完掘状況（南方向より）



2. SA090検出状況（南方向より）



3. SD038・039・046・054土層観察状況（南方向より）



4. SD046土層観察状況（南方向より）



5. 調査区南壁東側土層観察状況（北方向より）



6. 調査区南壁中央土層観察状況（北方向より）



7. 調査区南壁西側土層観察状況（北方向より）



8. 調査区完掘状況（西方向より）

遺物写真①



1. SD008 第32図1



2. SD008 第32図2



3. SD008 第32図3



4. SD008 第32図4



5. SD008 第32図5



6. SD008 第33図2



7. SD008 第33図3



8. SK087 第25図3



9. SD008 第33図11



10. SD008 第33図1



15. SK087 第26図2



11. SD008 第33図12



12. SD008 第33図10



13. SD008 第33図13



14. SD095 第34図7



16. SH032 第27図1・2

遺物写真②



1. SK005 第40図



2. SH024 第18図 1



3. SH024 第18図 2・3・4



4. SH024 第18図 5



5. SH027 第23図 2



6. SH032 第28図 3



7. SH032 第28図 13

ふりがな	みやぞのいのくちいせき だいがじょうさほうこくしょ
書名	宮菟井ノ口遺跡 第5次調査報告書
副書名	集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第89集
編集者	古川 匠 奥村 義貴
編集機関	大分市教育委員会
所在地	〒870-8504 大分市荷揚町2番31号 TEL 097 (534) 6111
発行年月日	西暦2009年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
宮菟井ノ口遺跡	大分市大字宮菟井ノ口	44201	322349	33°12' 36"	131°33' 23"	2008.5.7 2008.6.30	約200	集合住宅建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項
宮菟井ノ口遺跡	包蔵地・ 集落・水 田跡	弥生～ 古代	竪穴住居跡・溝状遺構（環濠・水路）・ 水田跡ほか			弥生土器・土師 器・須恵器		

概 要	本書には宮菟井ノ口遺跡第5次調査の成果を所収する。周辺の既往調査では、弥生時代中期初頭頃から古墳時代後期の竪穴住居跡をはじめ、弥生時代後期頃から古墳時代前期の土器植墓群などが存在し、当該地一帯が、居住域として評価されている。今回の調査地では微高地と低地が確認でき、微高地上では、弥生～古墳時代の竪穴住居跡と、周辺調査地で確認された集落を囲む弥生時代後期の溝状遺構を確認した。低地では古代から近世の水田跡と、各水田跡と対応する溝状遺構を確認している。 また、居住域の形成される微高地の範囲もおおよそであるが推測することが可能となった。既往調査の成果と今回の調査結果を鑑みると、微高地の中心部に弥生時代中期の遺構が展開し、古墳時代においては居住域が拡大したのと考えられる。
-----	--

大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第89集

宮苑井ノ口遺跡

第5次調査報告書

－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2009

平成21年3月31日発行

発行 大分市教育委員会

大分市荷揚町2番31号